
希望と絶望を持つ御遣い

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希望と絶望を持つ御遣い

【Nコード】

N5624U

【作者名】

S

【あらすじ】

『希望と絶望を持つ御遣い』は打ち切りにさせて頂きました。いつか続きを書くかもしれません。その時はよろしく願います。

お知らせ

どうも～です。

本当は月曜日から書くこうと思っていたんですが
考えなおして今日から書くことにしました～

さて、今回もオリキャラでますよ～

さ、一刀君の弟、刀次くんかも ン

「全く、こんな駄文作者の小説で出ないと
いけないなんて屈辱だぜ」

ひどっ！俺だって頑張ってるんだよ！
ね、一刀君！

「いや、何で二つ同時にやってんのか
不思議でならないんだけど」

裏切り者……！

あ、二つ同時にやっている件はね
忘れないようにするためだよ。

「すぐ忘れるってことだな」

ひどい……

「まあまあ、そう言えば何か言わなきゃいけない
ことがあったんじゃないのか？」

あ！そうだった実は二つ同時にやるって言っても

実は違うんです。

「は？意味分かんねーんだけど」

二つ同時にやるって言っても

週でローテーションするんですよ

「はい？」

「あゝ分かった。この週は『三人の天の御遣い』

この週は『希望と絶望を持つ見遣い』ってゆう風に
決めてるんだろ？」

そうそう、明日から一週間は『希望と絶望を持つ見遣い』

をやってその次は『三人の天の御遣い』を

やるんだ。そうすると少しは負担が減るかなって思ってたさ。

「ま、そう言うことなら頑張れよ」

え？

「俺達も頑張るから」

え？え？ありがとう皆！

一緒に頑張ろう！

「「忪！」」

では、本編もお楽しみください！

「俺達の活躍楽しんでくれよ！」

「頑張ります！」

一話 始まり（前書き）

始めました！『希望と絶望を持つ見遣い』！
さて、楽しみにしていらっしゃる方々の為に
挨拶は短めにして
お楽しみください！

一話 始まり

「一刀……」

そこには少女がいた。

彼女の名前は曹操この大陸の王。

そして、一人の少年を愛した少女。

今でもここに来たら彼女は涙ぐんでしまう。

「う……う……一刀……一刀！」

一緒に居たかったのに……！

私の横に居てほしかったのに……！

どうして居なくなつたのよ……！

あなたを愛してたのに……！」

こんな時彼が居たら彼女を後ろから優しく抱きしめるだろう。

だが、今は彼は居ない。

天に帰ってしまった。

それでも彼女は今まで皆の前では冷静だった。

それでも、一人の時は泣いている。

皆もそれを知っているのだが口には出さない。

彼女がそれを許さないから。

すると、彼女は涙を拭いて

「一刀、いつか帰ってくることを祈っているわ。
その時は……」

彼女は天を見てこう続けた。

「少し位は素直になってあげるわ」

そして、彼女はそこから自分の城に向かって走った。
いつか彼は帰ってくる。そう、信じて……

どこか分らない場所

「やっと、見つけたか」

「一年かかりましたね」

「ふむ」

ここはどこだ？彼等は一体何を話しているんだ？

「あ、気がついたようです。

兄貴聞こえるか？」

「ん？ああ」

「ふむ、目を開ける」

ん？俺は目を閉じてるのかそりゃ

何も見えないよな……

俺は目を開けた。

そこに居たのは俺と同じくらいの少年と

大人の男の合計二人だった。
いや、それよりもこの状況
何だよ……

「ここは？」

今の状況はいたって不思議。
だって、俺は……

「浮いてる！？」

そう、浮いてるのだ。
今の状況は全く意味が分からない。
すると、大人の男が

「ははっ、予想通りの反応だな」

「そんなことどうでもいい。
あんた達は一体誰なんだ？
それに、ここはどこだ？」

すると、大人の男が

「ここは、世界の狭間だ。」

「世界の狭間？」

「ああ、どこの世界にも属さない場所、
それがここだ」

「何で俺はここに？」

すると、今度は若い少年が

「兄貴はあの世界で歴史を変えすぎたのさ。

だから、兄貴はあの世界から罰として

飛ばされたでも、兄貴はあの世界に

長く居過ぎてあの世界の住人になっちまった。

世界の住人になったらその世界でしか

生きられ無い。

だから、あの世界がしようとしたことは

いろんな意味で兄貴を殺すことなのさ。

理解できたか？」

「ああ、でも一つ質問がある」

「ん？」

「兄貴って俺のことか？」

そう、さっきからこいつは俺のことを

兄貴って呼んでいる。

俺には弟なんて……

すると、大人の男が

「お前にはな、しかし、世界が一つでは

無いようにお前も一人ではない」

「じゃあ、こいつは別の世界の俺の弟なのか？」

「その通りだ」

「じゃあ、何でここに居るんだ？」

別の世界の俺と居れば良いじゃないか」

「それは……」

俺がそう言うとその少年は俯いてしまった。

何か聞いちゃいけないことでも聞いちゃったのか？
すると、大人の男が

「こいつの世界のお前は死んでしまったのだ。

そして、こいつの世界のお前は私と接点が

あった為私にこいつを頼んだのだ」

「そうか……ごめんな」

「いや、今は別の兄貴が居るからな！」

「そうか」

こいつは強いな、俺と違って……
すると、

「そろそろ、本題に入るぞ」

「本題？」

「こいつと会わせる為だけにお前を探して

いたと思ったのか？」

「ごめん。思ってた」

「「はあ……」」

溜め息つくなよ……

「お前には修行してもらおう」

「へ？何のために？」

俺はそいつが言った言葉を信じられなかった。
いや、信じることをしなくなかったんだ。
だって

「お前の愛する者達が殺されるからだ」

「す、すまん、もう一度言ってくれ」

俺がそう言つと男は静かにこう言った。

「お前の愛する者達が殺されるだろう。

お前が愛する者達を救う為には希望になれ」

俺は男に掴みかかった

「どうしてだよ！どうして華琳達が殺されるんだよ！
そもそも希望って何だよ！」

「兄貴！落ち着け！それをこれから話してくれるから！」

弟が俺を落ちつけようと俺を掴む。

「悪い……頭に血が上った……」

すると、弟は笑って

「いいぜ。今で頭に血が上らなかつたら
兄貴じゃない」

「ありがとう、ええつと……」

「そう言えば自己紹介して無かつたな。
俺は刀次、よろしくな！」

「私は鷺^{さぎ}だ。

それと、お前達の修行を
手伝う者を紹介しよう」

「俺達？」

修行するのは俺じゃないのか？
すると、刀次が

「俺も修行するんだよ」

「え？そうなのか？」

「兄貴と修行したかったからな」

「そうか」

可愛い弟だな

出来れば妹が良かったけど……

「何か失礼なこと考えなかったか？兄貴」

「そんなことないぜ、刀次。

鷺、それより希望になれってどう言うことだ？」

鷺は静かにこう言った。

「ふむ、お前は曹操達を殺す絶望になることもあるし、曹操達を生かす希望にもなると言うことだ」

「そうなのか？」

「ふむ、敵はお前を希望として讃えている。」

「敵って？」

「分からない……だが、お前の愛する者達を殺そうとしているのは確かだ」

「そうか……でも、俺は相手方の希望になる気は無いな」

「そうか、ならばお前を相手方の
絶望に変える為にお前達の修行を
手伝う者を紹介しよう。貂蝉！」

貂蝉！？あの超絶美女！？

やったー！

横で刀次も喜んでるぜ！

さて、どんな人かな？

「どふううう、喜んでくれて

嬉しいわゝ貂蝉よゝ」

「嘘だっ！」

「二人とも、否定したい気持ちは分かるぞ。
だが、事実だ……」

くそっ！天国から地獄に堕とされた気分だっ！
刀次も泣いてるじゃないか！

「さて、泣いてる二人は置いといて」

「ひどい！」

「しょうがないだろ！私だって初めて会った
時は否定したかった！」

「「鷺……」」

そうだな……皆そう思うよな……
それに、修行すれば華琳達を救える
かもしれないんだ。ここは我慢だ！
俺は立ちあがって

「早速修行を初めてくれ！」

「ふむ、刀次は？」

「俺も兄貴に同意だ」

「分かった十年後には立派な剣士にしてやる！」

はあ？こいつは今何て言った？

十年後？そんなに時間をかけられる訳
無いだろ？何言ってるんだ？こいつは

「言い忘れてたわね」この世界は
他の世界より十倍早く時間が流れているのよ」

「は？十倍早く時間が流れていても
しょうがないんじゃないか？」

俺達も他の世界の奴等より
早く成長するだろうから……」

そう、刀次の言う通りだ
俺達が華琳達より

早く成長しすぎたら
間違いなく

分からなくなってるぞ俺。

すると、貂蟬が

「その点は大丈夫よ
だつてあなた達は
このここの住人では無いもの」

「え？」

今度は鷺が

「人の成長は所属する世界によつて
違う。

それにここは少し特殊でな、
ここで生まれない限り
ここの住人になることは無い」

ん？じゃあ……

「ここで生まれる人も居るのか？」

「うむ、居るぞ」

「刀次、見たことあるか？」

「ああ、すごくいい人達だぜ」

「そうか」

「うむ、だから、こちらの世界では
十年だがあちらでは一年だ。

良いな？」

俺と刀次は顔を互いに見合って

「「ああ！」」

俺達の修行は俺達にとって長いかもしれない。
でも、華琳達

一話 始まり（後書き）

さて、修行が始まりますが……
修行の描写をするのは無理です！
まあ、修行以外の所で頑張ります！
応援よろしくです！

二話 伝言(前書き)

こんにちは

いやゝまさか、一日に三つ上げられるなんて思って無かったですよ

まあ、それは頑張った結果ということでは

一刀「自分で言うか？」

いいじゃんゝ頑張ったんだしゝ

一刀「はあ、まあいいか……」

さて、皆さんこれで始まりです！」

ひどい！皆俺の唯一の活躍の場を取らないで！

二話 伝言

「はあっ！」

ガキンッ！ガンッ！ガンッ！

「おらあっ」

ガンッ！ガッ！ガッ！

今俺達は修行をしている。修行と言っても
刀次との打ち合い。鷲との修行で俺達はどんどん
成長してきた。

俺が華琳達の為に修行をすると決めてからもう九年と半年
あと半年で華琳達と会える。

そのことを思うと心が躍る。

が……

「おらああああっ！隙ありいいいいっ！」

「うおっ！」

ガキンッ！

「あぶねえ……」

「はあ……兄貴、曹操達のこと考えてただろ？」

「え？何で分かるんだ？」

「いつも兄貴が集中を乱す時はそういう時って
相場が決まってるんだよ……」

刀次は呆れた顔をしている。確かに最近華琳達のことを
考えすぎてるか……

これは気をつけないとな……
すると、鷺が

「おい！一刀！」

「ん？何だ？」

鷺が修行中に俺を呼ぶなんて珍しいな。

何かあるのか？

「鷺！兄貴だけに何かやるのか！？ずるいぞそれは！」

「何もやらん！ただ、曹操達の世界に行くから
手紙を書けと言っただけだ！」

「！華琳達の所に！？」

「ふむ、今日は三国会議がある日だ。

だから、三国にお前が帰ってくることを
言っておいた方が良いだろう。」

「分かった。修行は？」

「貂蝉に言ってる」

「どふううう、よろしくね」

マジかよ……

「気持ちは分かるが嫌そうな顔をするな。
早く手紙を書け。」

「ああ、久しぶりだなあ、文字書くの」

上手く書けるかな？

俺はそんなことを思いながら鷺から
筆を受け取って文字を書く。

「へえ、漢文かあ」

「当たり前だろ、あそこは中国の昔のような
もんなんだから」

「そうだよな」

「よし、終わった。鷺、頼む」

「うむ、頼まれた。貂蝉、手加減はしろよ？」

すると、貂蝉は気持ち悪い踊りを踊りながら
文句を言った。

「今、二人がどれだけ強いって思ってるのよ？
私が殺されるわ」

「安心しろ、貂蟬、変態は死なん！」

「ちょっと！それどういう意味！？
ちよっ！待ちなさい」

鷲は答えずに消えた。

「全くもう！逝くわよ！二人とも！」

「文字が違う！」

「細かいことは気にしない！」

「うわあああ——！鷲————！」

鷲side

む？今一刀達の声が聞こえたような……
気のせいかな……

しかし、一刀の記憶から曹操の気を読みとって
場所を読みとったが正確だな。

やはり、一刀が強く曹操のことを
思っていたということか。

ここは……洛陽だな。

あの大战が終わって洛陽の城が曹操の

城になったか。

「よし、行くか」

洛陽の城

「おい！ここは一般人は立ち入り禁止だ」

城に着いたが兵士が剣で私の行き先を塞いでいる。

ふむ、出来れば手荒なまねはしたくなかったんだがな……

「私は曹操に渡さなくてはいけないがある。
押し通らせてもらっぞ」

「なっ！？」

私は兵士の剣の刃を握って兵士の剣を曲げ
兵士の腹に正拳をくらわせる。

バゴッ！

「ぐはあっ！」

ふむ、もう力ずくだな。

帰ったら一刀に怒られるか……

「いや、今はそんなことを考えている場合ではないな」

私は曹操に一刀の手紙を渡す為に走った。

玉座

「曹操様！」

「何事だ！今は三国会議の最中だぞ！」

「申し訳ありません！周公謹様！ですが敵襲です！」

「何！数は！？」

「一人！今こちらに向かって……ぐわぁっ！」

ドゴオオオッン！

「な……！？」

「ふう、やっと着いたか……」

私が着いた時武將は自分達の王を守る為に前に出てきていた。

「ふむ、私は曹操に用がある。
そこを退け」

「ふざけるな！ここまでして貴様生きられると思うな！」

手を出して来たのはそっちだろうに……

まあ、いい。

ここまで来れば良いのだ。

ここで一刀のことを言えば……

「我が名は鷲！お前達の愛する北郷一刀をお前達の元へ返す為に鍛えているものだ！今日は奴が書いた手紙を届けに来た！」

「な…何ですって……？」

「この手紙は北郷一刀が書いた物だ！読んでくれ！奴の心の込めた手紙を！」

私は一刀が書いた手紙を出して言った。
すると、曹操は

「春蘭！受け取りなさい！」

「しかし、華琳様！こ奴の言うことが本当だと言うことは……」

「偽物なら殺せばいいわ！早く受け取りなさい！」

「は、はっ！」

夏侯惇は私から手紙を受け取り曹操の元に持って行った。
そして、曹操は手紙を広げ……

華琳 side

私は鷺とかいう者が持ってきた手紙を読んでいた。
そして、読んでいる最中涙ぐんでしまった。

「う……う……」

「華琳様!？」

「大丈夫よ……これは間違いなく一刀の
書いた物よ……」

「何と書いてあるのですか？」

私は春蘭に言われて手紙を読もうとしたが……

「まずは、北郷隊の幹部達を連れてきなさい」

「はいっ!」

北郷部隊にも知って欲しい。
一刀が心を込めて文を書いたことを。
私は鷺に質問をした。

「鷺、一刀は帰ってくるのかしら？」

「うむ、必ず帰ると意気込んでいた」

「そう」

私が鷺の返事に安心していると

「華琳様！北郷部隊の者達を連れてきました！」

「華琳様！隊長が書いた文が届いたというのは本当ですか！？」

「早く読んでなの〜！」

「せや！あたい達がずっと待ってたんは知ってるやろ！」

三人ともとても嬉しそうに目を輝かせている。

「本当よ。今から読むわ」

私は少し息を吸って一刀が書いた文を読む。

『皆元気か？俺は元気で毎日の修行の日々を過ごしてるぜ。』

そう言えば俺には弟が居てな素直で良い弟だ。

弟も連れて行くから皆仲良くしてやってくれよ。

あ、そう言えば、天下一品武道会ってのがあるって聞いたけど
本当にあるのか？

俺も出たいけど俺が行く時には終わってるよな〜

ま、良いけどな。

皆元気でな！

北郷一刀より』

「ですって、変わって無いわね一刀も」

手紙を読んでいる間北郷隊の皆は泣いていた。

「隊長……」

「隊長お……」

「早く会いたいのお……！」

「そうね。鷺、一刀はあとどれ位で修行を終えるのかしら？」

「ふむ、あと一カ月程だ」

私は桃香と蓮華に

「二人とも、二人に一刀を紹介したのだけど少し待ってくれないかしら？」

すると、二人は笑顔で

「うん！天の御遣いさんってどんな人なのか興味あるもん！」

「そうだな。私も興味がある」

「ありがとう。桂花！」

「はっ！」

「天下一品武道会の開催を一カ月遅らせなさい」

「御意！」

すると、鷲が帰るのを見て私はそれを止める。

「鷲、待ちなさい」

「む？」

「一刀に伝えて欲しいことがあるの」

「良かろう。何だ？」

「皆あるかしら？」

「おう！あるわ！」

「私も」

「私もです！」

「あんな男に伝えてやることなんてこれ位です」

「私もあります」

「私もあるわ！」

「紗和もあるの」

「風もあります」

「私もあります」

「ボクもあります！」

「私もです！」

「一人ずつ言え。紙に書く」

世界の狭間

一 d s i d e

「帰ったぞ」

「おい！鷺！貂蟬、が全く加減しないんだ！
どういうことだ！」

さつきから追いかけて回されたり抱きつかれそうになったり……
もうこいつと修行するのは嫌だ！

「まあまあ、落ち着け。曹操達からの伝言だ」

「え？華琳達から？」

「うむ、全員同じことを言っていた。」

「何て？」

『早く会いたい！』

「これだけだ」

「っ！そうか……」

俺は泣きそうになるのを我慢して

「さあ、修行再会だ！」

「うむ！」

「ええ！」

「ああ！」

華琳、皆待っててくれ。
すぐに行くから。
皆に会いに！

二話 伝言（後書き）

ふう、終わった〜！

次はやつと一刀が曹操達に会えます！

皆さん！一刀達の感動の再会のシーン
見てくださいねー！

三話 再会の為に（前書き）

こんにちわ〜！

いや〜本当に暑いですね〜

いや〜今回一刀達と華琳達を会わせようと思っただけですね〜

長くなるからまた次回でよろしく
お願いします。

それと、今回出てくる刀ですけどね〜
名前が……

まあ、気にしないでください……
では、は

刀次「では、始まり〜」

えええ〜！？

刀次「気にするな」

ひどい……

三話 再会の為に

「おらあつ！」

ビュンッ！

俺は貂蟬に向かって走り刀を振う。

「甘いわ！」

簡単に避けられるが、予想通りの避け方だ。
避けた先には刀次が居た。

「貂蟬！これまでだ！おらあッ！」

「なっ！？」

ドゴオンッ！

「うつ……」

「おい、刀次、手加減はしたよな？」

「え？手加減って？」

まさか……

「手加減してないのか！？」

「鷺が手加減しなくて良いって言っただろ？」

「おい！鷺！」

俺は文句を言う為に鷺を呼んだ。

「む？」

「貂蟬が死んだらどうすんだよ！？」

すると、鷺が親指を立てて

「変態は死なん！」

「そんな訳『大丈夫よ』え？」

貂蟬の声が聞こえて振り返ると貂蟬が立っていた。

「貂蟬！大丈夫か！？」

「ええ、何とかね〜しかし、ここまで成長してるとはね……
たったの十年で……嬉しいわ〜！」

そう言っつて貂蟬が抱きついて来た。

「来るな！」

あの顔で抱きついて来られると気持ち悪い……
すると、鷺が

「貂蟬、やめろ」

「うう、仕方ないわね……」

ふう、なんとかなった……

すると、鷺が嬉しそうな顔をして

「二人とも良くここまで頑張ったな。

ここまで来ればもう私の教えることはない。

二人に餞別としてやる物がある。

少し待っている。」

鷺は小屋に戻って三振りの刀を持って戻ってきた。

「刀か？」

「うむ、刀次は二刀流だから『白刀・銀邸』と『黒刀・漆黒』だ。」

そう言って刀次に刀を渡す。

「ありがとよ鷺。絶対に忘れないぜ！」

「うむ、一刀は『鬼斬刀・國邸』だ」

俺は刀を受け取って

「俺は刀次と同じことしか言えない。

兄弟だからな。

でも、一つだけ付け加えるぜ」

俺は少し息を吸ってこう言った。

「あんたは本当の俺達の父親でなくても俺にとっては父親だ。」

ありがとう鷺」

「！！！！……そうか、貂蟬、私の息子達を頼む」

「ええ、頼まれたわ」

鷺は安心したように笑って

「では、行け。お前達の愛する者達の元へ」

「『『『応っ！』『』『』」

俺達は鷺に手を振りながら鷺が創ってくれたあの世界に続く道に入って行った。
華琳達に会いに行く為に。

鷺 side

「……ふっ、まさか、あんなことを言われるとはな……」

父親だと言われるとは思っていなかった。

「私が父か……全く……」

全く……本当にびっくりさせる……

「まさか、本当のことと言われるとは……」

そう、私は本当の彼らの父。

もちろん、別の世界のことだが

もう、私の世界の一刀達は

五年前に死んでいた。

だから、刀次の世界の一刀が

刀次を頼んだ時に承諾した。

不謹慎にもまた刀次を

育てられると思ってしまった。

だから、私はずっと黙っていたのだ。

それは最早私の性格と言っても言い。

厄介な物だとはちゃんと自覚している。

それでも黙っていた。

「ふつ、全く……質素な出迎えだな」

私は後ろに振り向いた。

そこには死の国からの出迎えと

言っても良いほどの兵が居た。

「ふむ、私はこの程度の出迎えでは死なんぞ！」

私はまた息子達に会う！そして、息子達の幸せを見届けるんだ！

「うおおおおおっ！」

「ふう、やっと着いたな」

俺達は世界の道をたどってようやく
この世界に着いた。

「ああ、しかし本当に何にも無いな」

「いいじゃない、その代り平和があると思えば」

「貂蟬の言う通りだぞ、刀次。

俺達はこの世界で平和を掴み取ったんだ。

そして、その平和を邪魔する奴等を倒す為に
ここに来たんだ」

その為に修行したんだから……

「ああ、そうだな。

じゃ、行こうぜ兄貴！

兄貴の愛する者たちの所へよ！」

「ああ！」

俺は華琳達に会う為に走った。
早く会う為に……

三話 再会の為に（後書き）

いやゝ少し短いですねゝ

ま、頑張りましたよ。

鷺は絶対また出ます。

というか出します！

約束します！

では、また次回ゝ

四話 天下一品武道会（前篇）（前書き）

長いので天下一品武道会の話は二つに分けます。

早く一刀と華琳を会わせたいよ（泣き）
では、始まり

……あれ？誰も邪魔しない？
皆どこ？

四話 天下一品武道会（前篇）

「はあ……なあ、貂蟬」

「何かしら」

「何で俺達はこんな物を着てるんだ？」

この世界に着いてから貂蟬にこれを着ると
渡されたのはマント。

何故こんな物を渡されているのか
全く意味が分かん。

すると、貂蟬が親指を立てて

「サプライズ性の為！」

「よし！刀次！」

「おう！」

俺は刀次と顔意思の確認をした。
どうやら協力してくれるらしい。
まだ、俺達は一人じゃ貂蟬には
勝てないからな。

「ま、待つて頂戴！冗談だから！」

ちっ！貂蟬を殺す口実が消えた！

「今、変なこと考えなかったかしら？」

「気のせいだ」

全く、こいつは勘が良いな。
だから、厄介だ。

「で？何でこんな物着てるんだよ？」

「敵が私達の顔を知っているか分からないからよ」

「ああ、分かった！もし、顔を知ってたら相手は
街中でも襲ってくるかもしれない。
それを防ぐ為だろ？」

「ええ、そうよ。刀次に百点！」

「よっしゃー！やったぜ！兄貴！」

「ああ、良かったな……」

「がきかよ、こいつ等は……
すると、交通人の声が聞こえた。

「なあなあ、確か今日だよな！天下一品武道会！
しかも一般人も参加できるんだよな！」

え？

「ああ！何でも今日、天の御遣い様が帰ってくるらしいぜ！」

「そいつは楽しみだ！あの人は良い人だったよな」

「ああ、天から来たって言うのに全く偉そうにしなかった」

「ああ言う人が神様とでも言うんじゃないかね」

「ああ、そうだな。

早く行こうぜ」

「応！」

そうか、華琳、俺の無茶な望みに答えてくれたんだな……

「兄貴……」

「一刀……」

「え？あ……」

俺は気付かない内に泣いていた。
嬉しかったんだ。

華琳が待っていたと言うことに。

じゃあ、俺はその答えに感謝しないとな。

「二人とも、天下一品武道会に参加するぞ」

「ああ、けど、早く会いたくないのか？」

「参加して優勝したら華琳自ら優勝杯位くれるだろ？」

その時に」

華琳はそう言う正確だから。

「そうか、兄貴がそう言うなら良いんだ。
行こうぜ」

「どふうううう〜じゃあ私も出るわ〜」

「それは駄目だ！お前が出たら俺が勝てなくなるだろ！
俺達二人なら勝てるけど個別戦なんだから！」

「うう、分かったわよ〜……」

いくら相手が貂蟬でも人をここまで人を落ち込ませると
罪悪感が生まれるな……

「ほら、行くぞ！兄貴だって早く行きたいだろうからな！」

「分かったわよ」

……刀次、さすがにそれはひどいと思うぞ……

「兄貴も早く！」

「ああ！今行くよ！」

ま、兄貴思いだから許すか！

天下一品武道会会場

参加手続きをした俺達は観戦席にいた。
控え室でない理由は一応どんな相手が
上ってくるのかを参考にしてもいいと
言う理由だそうだ。

まあ、助かるが。

「なあ、この配られた札、兄貴は何番だ？」

天下一品武道会の参加手続きをした時に札を
もらった。

地和が妖術をかけたマイクのような物で
札の番号をランダムに読み上げ対戦するらしい。

そして、敗者はこの札を会場側に返す。
そういうシステムだ。

「俺は154だ」

「俺は153。お互い当たりたくないな」

「ああ、全くだ」

刀次と当たったらこの会場が壊れるだろうからな。
でも……

「でもよゝ兄貴は優勝するんだろ？」

絶対当たるぜ」

華琳の言うことだから『勝者は一人よ!』
とか言うんだろうな……

「どうする?」

「どうしよ?」

「「はあ……」」

そんなことで悩んでいると地和の声が
会場に響く

『えゝ153番さんと51番さん!舞台にどつぞゝ』

「お、行ってくるぜゝ兄貴!」

「おう、頑張れよゝ」

刀次は笑顔で行ったが……

「あいつ加減するよな……」

「するでしょゝ」

「だよな……」

貂蝉が相手の時は加減しなかったけど
それは貂蝉が相手だからだよな!

きつとそうだ！

その頃華琳達は

「風、一刀が参加したと言う報告は？」

「今のところ無いですね」

「そう……」

華琳は鷲が一刀がここに帰ってくると言った時からずっと、嬉しそうにしていた。

仕事もいつもより早く終わらせていたし

一刀に一番に抱いて欲しかったから

閨に誰も呼んでいなかった。

それ位一刀を待っていたのだ。

「華琳様！恐らく修行が伸びているんです！諦めないでください！」

そう言う、春蘭もずっと待っていた。

早く一刀の笑顔が見たい。

ずっと、酒の席の時に周りにそう言っていた。

「大丈夫よ、春蘭。

私は諦め無いわ」

「そうですか。安心しました」

「華琳様、最初の仕合が始まります」

「ええ、最初は愛紗と沙弥？」

「ええ」

「愛紗の勝ちね」

「はい」

「うむ、沙弥とやらは可哀想だな」

「ふふつ、一回戦に愛紗と当たるなんてね」

「ま、見ておきましょう」

『さゝて、一回戦！一仕合目！
東からは蜀の青龍刀、関雲長！』

うわゝ刀次の相手、関雲長かゝ
加減しろよゝ刀次ゝ

『西からは一般の参加です！
何か布が奇妙ですねゝ
沙弥ゝ！』

刀次 side

「ったく、何て紹介の仕方だ……
ま、兄貴の知り合いらしいから
許すか……」

『では、位置について……』

始まりの位置は……ここか

『始め!』

戦いの銅鑼が鳴り俺は漆黒と銀邸を鞘から抜く。
でも、関羽は構えない。

「ん? 何してんだ?」

俺がそう聞くと関羽は

「まずはその布を外して欲しい。
その布があると集中出来ないからな」

そうしたいんだがな……
外すなって言われてるし……
ここは正直に言っても良いか。

「悪い。布は外せないんだ。
このままでやってくれないか?」

すると、関羽は少し考えて

「分かった、努力しよう」

良し！これで何とか戦えるか

「さうで、始めようぜ。

俺の双刀受けられるかな？」

「当たり前だ！」

「良し！行くぜ！

はあああっ！」

俺は関羽に向かって突撃する。

「くっ！早い！」

ガキンッ！

「おお！すごいな！結構本気だったぜ今の」

ま、今のを受けられるのは予想範囲内だけだな。

「結構？ではまだ奥があるのか？」

俺は親指を立てて

「うん！今のは四割位！」

「なっ！？今ので四割だと！？」

「ああ、次は本気で行くから……」

俺は構えなおして

「死にたく無かったら降参しろ」

「！！！！」

「分かった……降参する！」

『おーっと！？関雲長！ここで

降参だー！まあ、今ので降参しなければ
おかしいけどね……』

関羽は残念そうに出口へと向かう。

少しは打ち合った方が良かったかな……

呉の観戦席

「今の見た！？あの関羽が気合負けしたわよ！？」

「ええ、一体あの男何者かしら……」

「姉さま、少し気になることがあるのですが……」

「何かしら？蓮華」

「あれほどの覇気がありながら何故あの男は
先の大戦に名乗りを上げ無かったのでしょうか？」

「そうね、確かにそれは気になるわね。」

「どうしてだと思う？冥琳」

「分からないけど注意しておきましょう」

「そうね」

蜀の観客席

「申し訳ありません、相手の殺気に圧倒されました……」

「しょうがないのだ！相手の殺気が強すぎたのだ！」

「そうだよ！愛紗ちゃんが悪くないって！」

「そうですね……」

「愛紗は頑張った……」

「ありがとうな恋」

「うん……」

「しかし、あの人はどうして先の大戦に出なかったんでしょう」

「え？どうゆうこと雛里ちゃん」

「あわわ、朱里ちゃん……」

「えっ！？う、うん、あれだけの覇気があれば先の大戦でも活躍出来たはずです。それなのにできなかった……そこには一体どう言う意図があるのかそういうことです」

「確かに……」

「考えても仕方ないのだ！」

「そうだね！まずはこの大会を楽しも！」

「はい……」

魏の観戦席

「あの男一体何者かしら？」

「それは分かりませんが
どうして、あれだけの
実力がありながら
先の大戦で

どうして名乗りを上げなかった
んでしょうね？」

「確かに気になるわね。風どう思う？」

「分かりません」

「そうね……確かに分かることじゃ無いわ。
でも、気をつけないといけないわね」

「はい、最大限に監視しましょう」

「頼むわよ」

「はい」

一刀達の観戦席

一刀side

「おい、刀次」

「はい……」

俺は帰ってきた刀次に文句を
言う為に刀次を呼んだ。
そのことが分かっていたらしく

刀次も小さくなっている。

「お前な、あそこまで殺気を込めなくて良いだろ？」

「はい………すいませんでした………」

反省してるから許してやるか……

「次から気をつける」

「はい………」

すると俺は、貂蟬が笑っているのに気がつく

「どうした？貂蟬」

「いえ、本当に兄弟だなって思ってたね」

「そりゃそうだろ。兄弟なんだから」

何を当たり前のことを言ってるんだ？こいつは

「ふふっ、そうね」

「「??」」

変な奴だな……

すると、地和の声が会場に響く

『ええ〜74番さんと89番さん舞台にどうぞ〜』

「お？次は春蘭か」

「兄貴の知り合いか？」

「ああ」

懐かしいなあゝ

頑張れよ、春蘭。

俺達はこの仕合でこの

大会がとんでもないことになることに

まだ、気付いていなかった……

四話 天下一品武道会（前篇）（後書き）

終わり方が何かヤバイフラグが立ってますね
まあ、きつと一刀達なら何とかしますよ
一刀「ほう？貂蟬！こいつを食っていいぞ」
え、ちょ、ぎやあああっ！

五話 天下一品武道会（中篇）（前書き）

こんにちわゝ

今回はいきなりトラブルが起こります。

いやゝ戦いのシーンを書くのは無理だ。

そう思ってますゝ

まあ、それでも頑張りますよゝ

ああ、それと謝ることがあつてですね。

長いのでやつぱり三つに分けることにしました。

いやゝ実は『三人の天の御遣い』

でもやつちやたんですよゝ

ごめんなさい……

これからも応援してくださいね。

では、はじ

貂蟬「始まりよゝ」

うつつ……… 良いんだ………

もう………

五話 天下一品武道会（中篇）

地和のアナウンスで
選手が入場した。

一人は春蘭。

もう一人は一般枠の
参加者らしい。

俺的には春蘭に勝って欲しいが……

「兄貴、あの男なかなかやるな」

「ああ、春蘭でもてこずるかもな」

そう、相手はなかなかの使い手だ。
間違いなくてこずるだろう。
でも……

「春蘭はきつと、勝つよ」

そう、俺は春蘭が勝つって信じてる。
だから、俺はここで見ていれば良い。
春蘭が勝つ瞬間を。
すると、刀次と貂蝉は笑って。

「「勝つと（良いわね・勝つと良いな）」」

「ああ！」

頑張れよ春蘭。

俺は二度目の応援を送る。

『さうて、一回戦！二試合目！東からは魏武の大剣、夏侯惇！』

『西からは一般の参加です！金髪のかっこいい！金硬翼！』

「ふう、いきなりかよ……」

「む？どう言うことだ？」

「いや、何でもねえよ。さっさと終わらせようぜ。こっちは予定が詰まってるんだ」

金硬翼とか言う奴は剣を抜いて春蘭に向けた。

「うむ、私も早く優勝したいからな」

春蘭も剣を抜いた。

『さうて、緊迫してまいりました。では、位置について……』

二人は始まりの位置について

武器を構えて……

『始め!』

その銅鑼の音とともに二人は互いに向かっていく。

ガキイイイッ!

力はほぼ五分五分、いや……

「くっ!」

春蘭が少し押されている。
すると、春蘭はそこから
離れ相手と距離をとる。

「良い判断だ。力じゃ俺の方が
強いからな。
でもよ見ろよ。」

金硬翼は自分の足元を指して言った。

「俺達はお互いに中心から同じ距離で
始めたんだ。

なのに俺はお前より中心に
近い位置に居る。

武官ならどう言う意味が分かるよな?」

「……」

「俺はな、お前より早いつてことだ」

その言葉を聞いた春蘭は一気に顔を険しくした。
だが、春蘭は剣を構えた。

「それがどうした？」

「あ？」

「私はそれでもお前に勝つ。
勝って、あいつに強くなった
自分を見せなくてはならないんだ！」

すると、

「あははははっ！」

「何がおかしい！」

「いや、お前を笑ったんじゃ無いさ」

「何？では、何を笑ったのだ！」

「いやさ、流石夏侯惇だなと思ってよ」

「何？」

金硬翼は剣を構えて

「この程度で怯える程度の奴なら
興ざめも良いとこだったぜ」

「私のことを知っているようなことを
言うな」

「ああ、敵のことは良く調べておかないとな」

春蘭 side

「ああ、敵のことはよく調べておかないとな」

敵？この大会の相手は無作為に選ばれるはずだ。
なのに私のことを敵だと？

私のことを余程恨んでいる者か？

先の大戦で私が殺した者の家族か？

……駄目だ！考えても分かん！

今は戦うのみ！

すると、金硬翼は

「一応言っておくぜ。俺はお前のことを恨んでも
無いし、先の大戦であんたが殺した奴の家族でも
無い」

「何？では、お前は……」

『お前は何者なのだ？』そう聞こうと

したら

金硬翼はだるそうな顔をしてこう言った。

「何でも良いだろそんなこと。

今は楽しめば良いんだよ。

俺のことは俺に勝って俺の口から
聞きやがれ」

「そうだな……」

私は剣を構え

「今はただ戦うのみ！」

「ああ！来い！」

金硬翼も剣を構えた。

そして私は金硬翼に
向かって行った。

「うおおおおおっ！」

ガキンッ！

「流石、魏の大剣。
すげえな」

「当たり前だ！私は勝つのだ！」

「へえ、でもな……」

金硬翼は少し悲しい顔をして

「俺も負けられない理由があるんだから……」

金硬翼は顔を元に戻し

私の予想を超える言葉を言った。

「あんたには死んでもらうぜ!」

「なっ!?!」

金硬翼は剣を横払いの構えをとり

「『風払い』!」

ビュンツ!

ガキンツ!

「ぐあっ!」

私は何とか防いだが余りの衝撃に吹き飛んでしまった。
すると

「ふう、終わったぜ!お前ら!」

金硬翼が叫ぶと大男と女が客席から跳んできた。

「遅いぞ、迅」

「全くだよ」もしかしたら
迅が躊躇してるんじゃないかって
思ってたんだからね！」

「それはねえよ」

すると、大男の方が

「早くしろ」

「俺かよ……」

「当たり前でしょ！あんたがやった相手なんだから！」

「はあ、しょうがねえな……」

金硬翼は私に向き直り

「ごめんな……」

そう謝ったあと
大きく息をすって
こっ叫んだ。

「これは見せしめだ！良いか！
俺達はここに宣言する！」

俺達はこの愛する世界の為に
お前達を殺す！
まずはこいつからだ！」

蜀の観戦席

「不味いよ愛紗ちゃん！春蘭ちゃんが殺されちゃう！」

「分かっています！星！鈴々！行くぞ！」

「応なのだ！」

「うむ！」

呉の観客席

「明命！思春！
ついて来て！
春蘭を助けるわよ！」

「はっ！」

「はい！」

魏の観客席

「真桜！紗和！凧！秋蘭！霞！
春蘭を助けなさい！」

「はいなの！」

「了解や！」

「任しとき！」

「はっ！」

「はいっ！」

金硬翼は剣を振りかぶり

「じゃあな……」

剣を振りおろした……

嫌だ！死にたくない！

私はいつに会うまで死ねないんだ！

だが、私の思いとは裏腹に

私の体は動かない。

くそ！私はここで終わるのか！？

私は北郷に会えないまま

ここで……！

ふと、金硬翼が降りおろしている
剣を見る。

死ぬ寸前は不思議な物で
時間が遅くなる。

だから、見えた誰かが

金硬翼の剣を

止めたのを……

そして、それを

押し返したのを……

「ふう、全く……何なんだよ……

久しぶりに帰ったらいきなりこんな

目に逢うなんて……

何か付いてんのかな？」

「兄貴には立派な下半身の剣が

付いてるだろ？」

「そうよ、いつか私を虜にする素敵な……」

「それは無い！」

止めたのは愛紗と戦った布を纏った

怪しい奴の仲間だった。

とは言え、全員布を纏っていて

もしかしたらこ奴が愛紗と戦った者

かもしれないが。

すると、金硬翼が

警戒しながら聞いた。

「お前ら誰だ？」

すると、剣を受け止めた者が
纏っている布に手をかけて

「もう良いよな？」

「ええ」

「俺もそう思うな」

聞き覚えがある声だった。
でも、一瞬あり得ないと思っ
てしまった。

だって、こんなに奴は強くない。
でも、真実。

金硬翼の剣を受け止めた者は
大きく息を吸ってこう叫んだ。

「俺は北郷一刀！天の御遣いにして
お前達の……敵だ！」

五話 天下一品武道会（中篇）（後書き）

ふう、いやゝすいません……

え？何のことかって？

最初は二つに分けるって言ったのに

三つに分けるって言ったことです。

これからも多分こう言うことが多発しますが
応援よろしくお願いします。

六話 天下一品武道会（後編）（前書き）

こんちわゝ

いやゝ暑いですなゝ

今回はトラブルが収まるのが

ちよつといきなりですがよろしくお願いします。

では、は

華琳「始まりよ」

ええゝ！華琳さん！？

私のセリフ取らないでくださいよ！

華琳「いいじゃない、別に」

良くないっすよ……

華琳「早く始めなさい」

はい……

六話 天下一品武道会（後編）

一刀side

「俺は北郷一刀！天の御遣いにして
お前達の……敵だ！」

俺はそう叫びながら布を外す。
すると、春蘭が確かめるように
こう聞いた。

「北郷？本当に北郷なのか？」

俺は春蘭を安心させる為に笑顔で
こう言った。

「ああ、久しぶりだな。春蘭」

「っ！、ああ！ずっと待っていたぞ。
北郷……！」

「そうか、待たせちゃったな」

「もう、消えるなよ……」

「ああ」

俺達がそんなやり取りをしていると

金髪の男が嬉しそうにこう言った。

「おい！清！葆！当たりが来たな！」

「うむ」

「うん」

当たり？どうゆうことだ？

俺の表情を読み取ったのか

金髪の男が

「俺達はあるたを探してたんだよ。

あんたは確かに魏や蜀それに呉の希望だ。

だがな、それは俺達にとっても同じことなんだよ。」

俺は武器を構えながら

「つまり俺はあるた達の希望にもなるってことか？」

「そうだ。俺達はあんたが希望になるって信じてるんだ」

「そんなこと信じてるのか？」

「あ？」

「俺がお前達の希望？
そんなもんになる訳無いだろ？」

俺はこの国の……

この大陸の皆の希望にしか
なる気はない！

こいつ等にとって俺は……

「お前達にとって俺は絶望になってやるよ」
すると、金髪の男は笑って

「ふははははっ！そうだ！それでいい！
それ位の男でなくちゃ俺達の希望には
なれないよな！？葆！清！」

「うん、かつこいいな」

「うむ」

「どうするよ？葆、このまま戦うか？」

大男は首を振って

「いや、我等の目的は我等の存在を
三国の王達に知らしめることだ。
目的は達した。
それに……」

大男と女は選手の入りを口を見た。

そこには三国の武将達が居た。

「流石に彼等の相手をしながら蜀呉魏の三国の武将を相手をするのは無理がある」

「そうだよなゝあと三、四人は連れて来たかったなゝ」

「しょうがあるまい。まさか、我等の希望が来るとはあの御方さえも予想していなかったのだから」

「じゃあ。撤退で良いな？」

「しょうがないね」

「うむ」

金髪の男はこちらを向いて

「じゃあな！俺達の希望よ！また会おうぜ！」

金髪の男がそう言うと女が腕を上げる。

「待て！」

「移動符！」

俺は三人に向かって走ったが
三人は音も無く消えた。
俺は貂蝉と刀次に向き直り

「貂蟬、刀次、これから忙しくなるぞ」

そう言ったが、貂蟬と刀次は笑って

「望むところだ！」

「楽しみね〜」

どうやら、二人はどんなところになっても諦めることはしないようだ。そんなやり取りをしていると

「一刀！」

そんな声が聞こえて振り返るとそこには少女が居た。

俺が最も愛した少女が……

「華琳！」

俺が名前を呼ぶと華琳は俺に向かって抱きついてきた。

「一刀……！ずっと会いたかった……！」

あなたが居なくなってからずっと寂しかった……！でも、やっと……！やっとあなたに会えた！

もう、どこにも行かないで……！」

「ああ！もう、どこにも行かない！ずっと一緒だ！」

俺はそう言っただけ返した。

……はっ！不味い……

冷静になって周りを見ると

「……（ニヤニヤ）」「……」

貂蝉と刀次と劉備と孫策が

これでもかと言う位にニヤニヤ
していた。

俺は華琳の耳に小さい声で囁いた。

「華琳、冷静になって周りを見る」

「え？……あ！」

華琳は驚いた声を上げて俺から離れる。

すると、刀次がニヤニヤしながら

「んだよ兄貴！もっと楽しんで良かったんだぜ？」

「刀次……」

「んん？何だ兄貴？」

俺は刀を構えて

「死ね！」

俺は刀次に向かって剣を振りおろした。

だがそれを刀次は簡単に避ける。

「冗談だよ！それ位分かれよ！」

「うるさい！死ね！死んでしまえ！」

「うわー！ー！」

俺が刀次を追いかけて回していると
華琳が

「一刀、そろそろやめなさい。
子供みたいよ」

「ちっ！命を拾ったな刀次」

「ふう、助かったぜ」

次やったら華琳が止めても殺してやる！
秘かにそう心に誓った俺であつた……
すると、刀次が真面目な顔をして

「曹操、どうするんだ？この状況は不味いぜ」

そう、観客席では混乱が起きている。

『おい！三国の将来はどうなるんだ！』

『このままじゃ三国は……』

『いやだ！死にたくない！』

「確かに不味いわね。でも、大丈夫よ。」

「は？でもよ……」

刀次は納得がいかない顔をしている。
だが、華琳は余裕の顔だ。

「だって、あなた達が帰ってきたのだから。」

「は？それってどうゆう……」

華琳は大きく息を吸って

「皆の者！落ち着け！」

華琳がそう言うのと会場は一気に静かになった。

「確かに、奴等の宣戦布告は恐ろしい物
だったかもしれない！だが！私達の元に
希望が帰ってきた！」

華琳は俺達三人を指してこう続けた。

「この三人は我等の希望だ！この三人が
居る限り私達は負けることはない！
だが！私達は希望にしがみついただけ
ではなく別の希望も探す必要がある！
それは自分自身だ！

己が己の希望だ！

何があっても絶望するな！

何があっても屈服するな！

奴等に絶望を叩きつけてやれ！

勝利は我等にあり！」

華琳の演説が終わると

『うおおおおっ！』

『そうだ！俺達は勝てる！』

『将来が無いのは向うの方だ！』

そんな叫び声が聞こえると

華琳は刀次を向いて

「どうかしら？」

そう聞いた。

「ああ、正直予想以上だよ」

「ふふっ、光栄ね」

「ふっ」

「さあ、一刀、久しぶりに話しましょう。
私も話したいことがたくさんあるの」

「ああ」

俺が頷くと

「うちも話したいことあるんや」

「紗和も」

「うちもや」

「隊長がどんな修行をしていたのか気になります」

「風も聞きたいですね」

「私も風程ではありませんが」

「北郷！後で私と仕合え！」

「北郷、ずっと待っていたぞ」

「ちいも聞きたいことあるのよね」

「ふんっ！聞くだけ聞いてあげるわ！」

魏の武將と知將達が一気に俺に近づいてきた。

「分かった、分かった。刀次、貂蟬、お前も付いてこい」

「分かった」

「分かったわ」

貂蟬が返事をする。桂花が

「何よ！この化け物！」

あ、言っちゃいけないことを言った。

死んだな、桂花……

「何ですって！誰が存在してたら

地球の環境に悪い化け物よ！」

「ちよっ、そこまで言っとなっ、きゃあああっ！」

「兄貴……」

「はぁ……早速仕事が出来たな……」

すると、華琳が笑って

「頑張りなさい。頑張ったらそれ相應の褒美を与えるわ」

「よし！行くぞ！刀次！」

「はぁ……兄貴もかよ……」

「ほら、さっさとしろ！」

「分かったよ……」

それから桂花に抱きつきそうになった貂蟬を気絶させたり酒の席では、酔った華琳が俺の服を脱がしそうになったりそれら以外にもいろいろあったが俺は一つ誓った。

それは、この楽しい日々を絶対に壊させはしないという守りの誓い。

この誓いがある限り俺は華琳達を守り続ける。
絶対に……

六話 天下一品武道会（後編）（後書き）

ふう、次は拠点話です。

ですが全員上げると私が死にかねないので

華琳と凧（単独で）を上げようかと思っています。

文句がある方はコメントにて！

では、また次回！

拠点話 華琳（前書き）

こんにちは

今日は拠点話です。

前回後書きで何か注文が

ある場合はコメントくださいと

言ったのですが特に注文コメントが

なかったので華琳と凧の拠点話で行きたい
と思います。

あと、華琳と凧と一緒に書くと長いので

二話に分けます。

では、始まり

良し！邪魔されなかった！

拠点話 華琳

「うつゝん……もう朝か……」

くそ、昨日の飲み会で飲みすぎたか……

つたく、皆、どんどん勧めてくるんだもんな……

二日酔いはしてないみたいだけど……

「ああ、そう言えば今日は何にもすることが無いな」

昨日の金髪男達の襲撃事件で全員精神的に疲れている
だろうから少し休めと華琳から言われていたから
皆仕事は休みなんだが……

「休みだと逆にすることが無いから暇だなあ……」

俺が独り言を言っていると

「暇なら私と出かけましょう」

「はい？」

そんな声が聞こえて振り向くと
そこにはさっきまで居なかったはずの
華琳が居た。

「華琳！？いつの間に！？さっきまで居なかったじゃないか！？」

すると、華琳はニヤリと笑って

「これであなたが私達以外の女を連れてきてもすぐに来れるでしょう?。」

「連れてこないから!？」

でも、俺の心の中はと言うと。

俺のプライバシ-が!

このままじゃ****が出来ないじゃないか!

(****に何が入るかは察してください)

俺そんなことで悩んでいると華琳が顔を赤くしながら

「そんなことしなくてもいいじゃない」

「へ?。」

「あなたが呼べばいつでも私の身体を貸してあげるわよ」

「華琳……」

俺は華琳を抱きしめた。

「あつ……」

「好きだよ、華琳……」

「私もよ、一刀……」

俺達は顔を近づけた……
でもな、読者の皆。

こう言う時には大抵
邪魔が入るんだぜ。

「おい。兄貴！鍛練しようぜ！
……あ」

その邪魔は俺の愚弟だった。

「……………」

「……………」

華琳と俺は余りのことに固まっている。

「す、すいませんでしたー！！」

刀次は一瞬で謝って部屋から出た。
その間0.5秒！すごいな……
つて！そんなことどうでも良い！
くそ！あの愚弟め！

今度の鍛錬の時は
手加減せずに本気でやってやる！
俺が怒りの炎に燃えていると
華琳が俺を落ち着かせるように言った

「あなたの弟は悪くないでしょう。
それに本当はこう言うことをする為に
来たんじゃないんだから」

そうだ。華琳は確か『暇なら私と出かけましょー』

って言ったんだ。

あゝ！すごい恥ずかしい！

俺そう言うことをする為に華琳は
来たんだと思ってた！

俺がそんなことを思いながら
頭を抱えていると

「ま、良いわそう言う雰囲気にしたのは
私だし、今回は許してあげましょう。」

「ありがと。じゃ、出かける準備するから
外で待っててくれ」

「ええ、早くしなさい」

華琳はそう言って部屋の外に出た。

俺は着慣れているランチエス学園の制服を
着て財布をポケットにねじ込んで

壁に掛けてある國邸をベルトにねじ込む。

よし、準備オッケー！

俺は部屋から出て待っていた華琳に声を
かける。

「終わったぞ。華琳」

「ええ、じゃあ、行きましょう」

街

「そう言えば街に何しに来たんだ？」

そう言えば街に何をしに来たのか聞いて無かった
と思って聞いてみた。

何かすごく嫌な予感がするのはきのせいか……？
すると、華琳は良い笑顔になって

「下着を買おうかと思って来たのよ」

当たったー！嫌な予感当たったよ！
もう嫌だ！クソ！

「拒否権は？」

頼む！あってくれ！

だが、華琳の解答は意外なものだった。

「嫌なの……？」

ぐあっ！この可愛さは最早兵器だろ！
一体この一年間どうしたんだ！？
てかこんな顔してる子に対して嫌だ
なんて言える訳がない！

「嫌じゃない！行くぞ！」

「ええ（ニコ）」

ぐあっ！俺の理性が！

頼む！俺の理性！
耐えてくれ！

下着屋

「一刀、私が持っているこっちの下着と置いてあるこっちの下着はどちらの方が似合うと思う？」

「うん……」

まあ、華琳と下着屋に来たらこんな風になるのは
当たり前前の展開だよな……
でも、何か嫌じゃないんだよな……

「一刀、もしかして私が着てるところ想像してる？」

「だって想像しないとどっちが似合うか分からないだろう？」

さて、どんな反応がくる！？

「そうね、それもそうだよ」

あれ？昔の反応と少し違う？
素直になってる？
可愛いな

昔の華琳も可愛かったけど。

「それで、どっちの方が可愛いのか？」

「ああ、そっちの持つてる方が可愛かった」

「そう、じゃあ、こっちを買っわ。
ちよっと待ってて」

「外で待つてちゃ駄目？」

昔の華琳の反応は『だゝめ』だったけど
どうかな？

「だゝめ（ニコ）」

ぐあっ！昔の反応に加えて（ニコ）が加わったから
破壊力が半端無い！

でも、どうしたんだ？華琳は昔は

ここまで素直じゃなかったはずだけど……

そんなことで悩んでいると

会計を済ました華琳が

満足した表情で帰ってきた。

「一刀、行きたい場所があるのだけど
ついてきてくれないかしら？」

「ん？ああ良いよ」

「ありがとう」

湖

「ここは……」

「覚えてるかしら？」

「ああ、当たり前だろ？」

ここは俺達が俺達にとって大切な場所。
俺達が肌を重ねた場所だ。

でも、華琳は何でここに……
そんなことを思っている
と華琳は適当な岩に腰掛けた。

「一刀も座つたら？」

「ああ」

俺は荷物を置いて腰掛けられる岩を探す。
すると、華琳が

「何してるの？こつちに来て座りなさいよ」

「え？」

華琳が指した場所は華琳の隣だった。

「え？じゃないわよ……
早く来なさい」

「ああ」

俺が華琳の隣に行くと華琳が俺の手を強く掴んできた。

「どうしたんだ？華琳」

俺は心配になって華琳に尋ねる。
すると、華琳は声を震わせて答えた。

「嫌な夢を見たのよ」

「夢？」

華琳が夢でここまで怖がるのか？

華琳は夢なんて信じないと思ってただけだな……

華琳は声を震わせながらも続ける。

「あなたがまた消えて私達の前から消える夢よ」

「でも、そんなの……」

「ええ、ただの夢よ。あなたが関わらない夢なら私も別に信じなかったわ。

でも、あなたが関わってくると違うの」

「俺が関わるってどうゆうことだ？」

「私はあなたが居なくなってから毎日が苦しかった……」

それでも私は魏の王。その苦しみを皆に悟られては
いけないから頑張ったわ。皆は気付いていたかも
しれないけど……

私も魏の王である前に一人の女なの。」

俺は華琳の言葉を真剣な顔で聞いていた。
華琳をここまで苦しめたのは俺だ。

俺が諦めたからだ。

なら、華琳の不安を消すのは俺の役目だ。
俺は華琳を安心させる為に笑いながら
華琳に言った。

「華琳、俺は消えないよ」

「どうしてそんなことが言えるのよ」

「確信は無い。

でもな、俺も華琳と離れて苦しかった。
修行中ずっと華琳に会う為に我武者羅に
頑張った。

もう、あんな苦しみは味わいたくない。
だから、もう、俺は消えない」

「一刀……」

「約束だ」

「ええ、絶対よ？一生私のそばに居て私を
幸せにして？」

「ああ！絶対にしてみせるさ！」

華琳が俺のことを愛してくれる限り！

拠点話 華琳（後書き）

終わりました！

いやゝ拠点話って書く大変ですねゝ

さて、明日は出来れば夙✓の拠点話を

上げた後に明日から一週間『三人の天の御遣い』を

書き始めたいと思います。

駄文ではありますが。

どうかよろしく願います。

拠点話 凧（前書き）

こんにちわ

いやゝ実はですねゝ最近前書きに
書くことが無くなちゃったんですよ

金硬翼「がんばれよ」

え！？何でここに！？

金硬翼「刀次から聞いた」

あ、そう……じゃあ、始まりのあれやって

金硬翼「分かった。

では、始まりだぜ！」

拠点話 凧

「凧、ここら辺の見回りはこれ位で良いよな？」

俺は今街の警備をしている。

実は休みが与えられてたんだが

警備隊が休んだら街の警備が

どうのこうのと言われて

無理やり連れてこられた。

連れてこられたんだが……

「……………」

「凧？」

「……………」

「おい、凧？」

「……………」

「凧！」

「は、はい！後は大通りだけです！」

さっきからこんな感じだ。

俺が呼んでもまったくの無反応。

大声で呼ばないと反応しない。

おまけに顔が赤いしなあ……

何か無茶してんのかなあ……

「風、大丈夫か？さつきから呼んでもあんまり反応しないし顔が赤いぞ？何か無茶してんのか？」

「い、いえ！大丈夫です！無茶なんかしていません！」

「でもなあ……」

「大丈夫です。もし駄目だったらちゃんと休みます」

「そうか？無茶すんなよ？」

「はい。大丈夫です」

それから大通りの警備はちゃんとしたんだけど風調子はずっと同じだった。

城壁の上

街の警備が終わって俺は城壁の上に来ていた。

「ここからの景色はなかなかの物だな」

本当に良い景色だ。

街の皆が笑顔で過ごしている。

あの笑顔を守る為に俺達は

頑張っているんだな

そう思える。

そんなことを考えていると

誰かが上って来る音が聞こえる。

「あ、隊長」

「やあ、凧」

上ってきたのは凧だった。

俺は凧を手招きして

「凧、おいで」

「は、はい。失礼します」

凧は俺の隣に来た。

俺は街を指して

「凧、ここから見える街は俺達が
守ってるんだよな」

「は、はい」

「ここから見ると俺達は街の皆の
為に頑張ってるんだって思えるんだよ」

すると、凧は微笑んで

「私もここに来るとそんな感じがします」

「凧もか。そうだよなあ。」

凧は俺達の中で一番の頑張り屋さんだもんな」

「い、いえ！そんなことは……」

照れてる凧も可愛いなあ」

俺は無意識の内に凧を撫でていた。

「た、隊長！？」

「あ、ごめん。嫌だったか？」

「いえ、そんなことはありません」

「そうか」

「はい……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「と、ところでさあ！」

「はい？」

俺は沈黙に耐えかねて街の警備の時から気になつていたことを聞いてみた。

「街の警備の最中どうして俺が呼んでも反応しなかったんだ？」

「え、あ、えつと……」

凧は答えようとしているが慌てふためいている。

「凧、落ち着いて。深呼吸」

俺がそういうと凧は深呼吸を始める。

「すゝはあゝすゝはあゝ」

「落ち着いた？」

「はい。済みませんでした……」

「謝らなくて良いつてで、どうしたんだ？」

凧は俯いて答えた。

「心配になってしまったんです……」

「心配？」

「はい……隊長はまだ私のことを
愛してくださっているのか心配になって
しまったんです」

「俺は凧のことをまだ愛してるよ？」

「はい。それは分かっています。
分かっているのですが……」

「それじゃ何で心配するんだ？
俺が凧のことを愛してるって
分かっているんだろ？」

「貂蟬殿に聞きました。
私達にとっては一年でも
隊長は十年間の修行だったと」

貂蟬め！余計なことを！後で
斬り殺してやる！

俺が貂蟬に対して怒りの炎を
燃やしているとそれに気づいたのか
凧は慌てて

「た、隊長！貂蟬殿が自ら
言ったではありません！
私達が聞いたのです！」

「え？」

どうして凧達がそんなことを？

「人間はたった一年でそこまで強くなりません。でも私が見た隊長はとて強そうでした。私達など敵わない程に……だから、聞いたのです」

「そうか……でも何でそれが俺が凧を愛してるかとかに関わるんだ？」

「私達は何もしませんでしたから……」

「え？」

「隊長が修行して帰ってくると言うのに私達は何もしませんでした。私達はただ待っているだけでした。だから、隊長に見限られるのでは無いかと……」

ああ、そうか……

もう！そんな心配はしなくても良いのに……
凧は心配症だなあ……

俺は凧の心配

「凧、凧は……いや、凧達はちゃんと俺にのして欲しいことをしてくれていたよ」

「え？」

俺は街を指して言った。

「凧達はこの街を守ってくれてたじゃないか」

「そ、それは……」

「だから、俺は凧達を一生愛するよ」

「隊長……」

「凧……」

俺達はそのまま抱き合って口づけをした。
一生お互いを愛するそう言う誓いを
唇に乗せて……

拠点話 凧（後書き）

いやゝロマンチックに書こうと
思うとセリフと地の文の割合が
おかしくなりますねゝ

まあ、これから頑張りますよゝ

では、次に『希望と絶望を持つ御遣い』を
上げるのは来週になります。

『三人の天の御遣い』もよろしくおねがいします。

七話 三国会議（前書き）

こんにちわゝ

お久しぶりでゝす。

いやゝ昨日はちよつと考えてたら
時間

今回はちよつと一刀君の要望で……

ザシユツ！

ぎゃあああああつ！

一刀「さて、こんな駄文作者は放って
おきましょう。

では、始まりゝ」

誰か医者王を呼んでください……

ガクツ……

七話 三国会議

今玉座には三国の王と武将や知将が来て三国会議を開いている。

そして、華琳以外の武将や知将は全員俺を見ている。

刀次と貂蝉でさえもだ。

何故なら……

「なあ、華琳。どうして俺の膝の上に乗ってるんだ？」

視線が半端無い……特に桂花からの嫉妬の目線と刀次の軽蔑の視線が……

「……嫌なの？」

くっ！この涙目＋上目遣いは反則だ！
こんなのをみて嫌って言った奴は男じゃない！

「嫌じゃないよ」

やっぱりこう言っとかないとね！

「そう、なら良かった」

くそっ！この笑顔も反則だ！
何だよこの可愛さ！

これは男の理性を崩す為の笑顔だろ！
俺が居なくなってから華琳に一体何が！？

「兄貴とりあえず理性をそのまま保ってくれ
兄貴が曹操を連れて閨に行ったら会議が進まなくなる。
今回の敵は兄貴と深い関係があるんだから」

くそ！刀次め！邪魔をする気か！

「俺はあんな奴等知らないぞ？
希望とか言われたけど接点は無いんだから」

「分かってる。だが、閨には連れて行くなよ？
こんな時にはな」

「分かった。この会議が終わったら連れて行く」

「どふふふふ～曹操ちゃんが羨ましいわね～。
私も呼んで欲しいわ」

「絶対呼ばん！」

俺が貂蝉を閨に呼ぶ時は貂蝉を殺す時だ！

「どうでも良いけど軍議を進めていいか？
それと曹操は兄貴の膝から降りてくれ。
皆が集中出来ない。」

「あら、良いじゃない。一刀は私の物で
私は一刀の物なんだから」

「兄貴何したんだ？」

刀次から疑いの視線が！？

何で俺がそんな目で見られないと

いけないんだ！

実際何にも無かったって言ったら嘘になるけどさ！

「私と一刀は肌を重ねた仲なのよ」

華琳さ〜ん！言っちゃ駄目だって！刀次にはまだ早いって！

「まあ、二人の間のことは二人に任せるぜ……でもよ……」

「刀次、後で何か奢ってやるから」

こんなんで行けるか分からないけど……

「良し貂蟬！何か分かったことは！？」

行けたー！？刀次はバカなのか！？

「バカじゃないぞ」

「そんなこと言って無いだろ……」

思ってたけど……

「良いかしら？」

「ああ、悪い。始めてくれ」

「はい」

貂蟬は資料を読み上げていく。

「敵の正体はまだ掴めていないわ。
目的も不明。

だけど、ごしゅ……一刀君を
希望と崇めているのは確かね」

「ふゝ俺に何かあるのか？
皆は俺に何か感じるか？」

まず、呉の王孫策が口を開く

「私達はまだ会って分らないわね。
そうとう強いのは分かるけど」

「そうか劉備は？」

「かつこいいってことだけかな」

「兄貴……」

「言いたいことは分かる。
でも、今は耐えろ……」

「？何ですか？」

「いや、何も……」

本当に天然だな……こんなんで王なんて出来るのか？

「人は見かけによらないって言うわよ」

貂蟬、人の考えを読むなよ……

「華琳は何か感じないか？」

「昔より強くなったということしか感じないわね……ちょっとかっこよくなっただけ……」

「え？何か言った？」

最後の方は小声で何も聞こえなかった。それに、何か華琳が顔を赤くしてるし少し気になるな。

「な、何も言っただけだよ！」

「そうか。」

……でも、何も有力な情報は無し。はつきり言っただけにな……」

戦では情報の収集力が物を言う。
それで、俺達には情報が無い。
はつきり言ってやりづらい。
どうするべきか……
そんなことを考えていると
貂蝉が資料を
見ながらまだあるような
顔をしている。

「どうした？貂蝉まだ何かあるのか？」

「ええ、実は最近五胡に行ってみたのよ」

「どうしてだよ？」

「知り合いがそこに居るって言って
待ち合わせしてたのよ」

五胡で待ち合わせかよ……
こいつの神経おかしいだろ……

「で？何かあったのか？」

「ええ、その前に知り合いをここに呼んでも
良いかしら？詳しい話はそれからするから」

「洛陽に居るのか？」

「ええ」

「分かった良いぞ」

何か嫌な予感がするけど……

「ありがとう。じゃあ、呼んでくるわ」

貂蝉はそう言つて玉座から出ていく。
すると、刀次は顔を真っ青にして

「兄貴、すごく嫌な予感がするんだけど……」

「気にするな！ 弟よ！ 小さいことを
気にしてると前に進めないぞ！」

「兄貴！ 絶対小さいことじゃないぞ！」

「話が聞けないよりまし……今ものすごく
貂蝉の友達を想像して後悔した……」

想像して俺の脳裏によぎったのは
貂蝉みたいな格好をした化け物だった……

「まあ、兄貴しようがないってことで
諦めようぜ……」

「ああ……皆ごめんな……」

「「「一刀……」」」

皆、もう諦めた顔をしている。

俺の所為だな……

まあ、皆のことは頑張っ て守るか……

俺の命が危ないだろうけど……

すると、兵士がやってきて

「貂蝉殿とお友達がご帰還なさいました！」

「分かった通せ！」

「はっ！」

「……はあ……」「……」

皆溜め息ついてるな……

俺もつきたいけど……

すると、貂蝉に連れられて俺の想像通りの貂蝉の友達が来た。

「がははははははははは！」

卑弥呼である！謎の

巫女とでも呼んでもらおうか！」

「……ぎゃあああああっ！化け物！」」「……」

「華琳！？華琳！華琳————！」

華琳気絶しちゃったよ！

くそ！華琳！俺の所為で……！

俺が後悔してる

間にも化け物の侵略は

続いていた。

「誰が気持ち悪過ぎて夢に出てきてしばらくうなされる位気持ち悪い化け物じゃと!？」

「誰が気持ち悪い上に環境に悪くて居るだけで人間だけでなく地球にも悪い化け物ですって!？」

「「「誰もそこまで言っ
てなあああっ
い!」」」

俺が何とかしないと……俺が……皆を守らないと……!

ん? 何だ? 力が……

力が湧きあがってくる?

これなら何とか出来るかも

しれない……!

俺の心は熱く燃えているのに出た声は静かだった。

俺は華琳を持ち上げて

華琳を一応机の上に寝かせる。

そして、いまだに暴れている

二人の方を向いて

「……やめろ」

「「え?……ひっ!」」

貂蟬と卑弥呼と呼ばれた奴は
俺を見て震えている。

今の俺はそんなに怖いのか？
それなら止められるか？

「二人共これ以上悪ふざけをするなら
俺も悪ふざけで……お前達を殺すぞ？」

……あれ？何だ？

制御が利かない？

怒りが溢れてくる……！

止められない……！

「何なら今お前達を殺して
やろうか？

楽に死ぬるかもしれないぞ？

タブンダケドナ？

ハハハハハッ！」

「っ！兄貴！」

刀次は立って俺に

正拳突きをくらわせる。

ゴッ！

「ゲッ！」

その痛みと共に怒りが退いていき
力も退いていく。

力が退いて俺は膝をついた。

「はぁ、はぁ、悪い刀次。
もう、大丈夫だ」

「どうしたんだよ？兄貴」

「分からない。いきなり怒りが
力が湧き上がってきたと思ったら
怒りが湧いてきて……」

「もう良い。会議を続けられるか？」

「大丈夫だ」

「そうか。二人も謝れ
お前らの悪ふざけが
こんなことになったんだから」

「刀次、それは……」

「良いのよ。一刀君。
ごめんなさい……」

「儂もやりすぎたわ……」

「良いよ。二人共代償は
詳しく話を聞かせてくれる
こと。それで許す。」

「うむ。なかなかのおのこではないか！ 儂好みじゃ！」

「卑弥呼には渡さないわよー！」

「悪いけど俺は好きな人が居るから」

「「ううー」」

俺は二人の嘆き声を聞きながら
机の上に寝かせている華琳を
持ち上げ座って俺の膝の上に置いた。

「じゃ、詳しく話してくれ貂蟬」

「はい。実は

五胡は私達に降ろうと
しているって言う噂が
あるのよ」

「え？」

真実が分からない噂は一体俺達の
運命をどう言う風に運ぶのだろうか……
その噂は俺達の希望となるのか……
それとも絶望になるのか……
それは神のみが知る……

七話 三国会議（後書き）

終わりました隊長！色々考えていたら
上げる時間が遅くなりました！
今すぐ基地に（家に）帰還します！
では、また次の任務（次回）で！

八話 素直になれなくて（前篇）（前書き）

こんにちわ

今日もネットカフェに来ています。

いや、昨日の終わり方を見ると今回の

タイトルは「は？」って言いたくなりますが

お付き合いください。

彼女が可哀想なので……

では、始まり

八話 素直になれなくて（前篇）

「貂蟬、一体どう言うことなんだ？そもそも五胡が俺達に降ったことで何か利益でもあるのか？」

貂蟬達が持ってきた五胡が

俺達に降るという情報。

貂蟬を疑う訳じゃないが

流石に信じられない……

五胡が俺達に降ったところで

何の利益がある？

……ここは我等が誇る睡眠軍師殿に意見を聞いてみるか……

「風は五胡が降ることに
ついてどう思う？」

「ぐぐぐ……はっ！

お兄さんがほとんど話を進めるから
暇になって寝てしまったのですよ」

「だから、意見を今から聞くんだよ……」

「そうですね……

現時点では情報が少なすぎて
分かりませんね」

やっぱりか……

流石に今の時点で答えを出すのは

早いか……

例え出したところでそれは推測。
完璧な答えじゃない。

「じゃあ、この会議はここまでだな。
今会議を進めててもいたずらに時間を
使うだけだ。それで良いよな？ 兄貴」

「ああ、どっかの誰かさん達の所為で
気絶した華琳を部屋に運ばないと……」

俺がそう言つと卑弥呼と貂蝉は
しぼんでしまった。

まあ、当然の罰だろう。
本当なら思いつきり殴つても
良かったんだが……

「じゃあ、兄貴。曹操が
気絶してる今は
最高権力者は実質兄貴なんだから
終了させてくれ」

「ああ、この会議で
得られることはもう無い！
よって今会議は終了とする！」

俺の号令と共に各々皆席を立つ。
つてゆうかいつの間に俺の
権力はここまででかくなつたんだ？
俺はそんなことを思いながら

自分の部屋に戻って行った。

桂花 side

「種馬のくせに……」

私はいつの間にかそんな言葉を口にしていた。
あいつの号令は確かに威厳があった。

王としての威厳は華琳以上だったかもしれない。
でも、許せない……

華琳様を長い間待たせておいて……

華琳様も華琳様だ…… あんな男をまた傍に

置くなんて……

皆を待たせておいて……

皆を泣かせておいて……

私を泣かせておいて……

いつからだろう…… あいつに構って
欲しいって思ったのは……

いつからだろう……あいつが華琳様の

隣を歩いていると私の隣を歩いて

欲しいと嫉妬するようになったのは……

私はあいつが嫌いではなく……

好きになつていたんだ……

だから、構つて欲しくつて……

いろんな悪戯をした……

そうすればあいつは構ってくれる……

構っている間はずっと私を見ている……

でも、その顔は笑顔じゃない……

私が見たいのはあいつが私と話していて

笑っている顔……

あの笑顔で私を見て欲しい……

でも、素直になれない……

怖い……

もし、私の気持ちが届かなかったら？

そう考えると怖くなる……

私はこの気持ちをどうすれば良いんだろう？

ずっとしまつて隠しておけば良いのだろうか？

嫌だ……言いたい……

あいつに……一刀に『好きだ』そう言つて欲しい……

皆にしているように私を抱きしめて欲しい……

でも、私は臆病だ……

戦ではどんな状況でも怖いとは感じない。

でも、いざ行動を起こすとなると怖くなる……

私はどうすれば良いんだろう……

「苟？さん？どうしたんですか？」

一刀の弟、刀次。

一刀に似ている。

でも、一刀に感じている気持ちはこいつには
感じない……

「別に何でも無いわ……」

私はそう言っただけその場を立ち去ろうとした
でも、刀次の次の言葉がそれをさせなかった……

「あんたも魏の皆と同じで兄貴が好きなんですね？」

「っ！」

止まった……私の心が……

身体が……

ここから立ち去ることが出来なくなってしまった……

「兄貴はそう言う話にはすごい鈍感ですからね
でも、兄貴はあなたの気持ち、ちゃんと
受け止めてくれると思いますよ？」

「……何でそんなこと分かるのよ？」

私は今まであいつに……一刀に

嫌われることをしてきたのよ？

嫌われてるに決まってるじゃない……

それなのに何で一刀が私の気持ちを……」

「兄貴は悪戯程度で人を嫌いになりはしませんって。

大丈夫、不安なら今までのことを謝ってから告白すれば
良いんですよ」

「……本当に大丈夫なんでしょうね？」

「ええ、多分兄貴は鍛練出来るような場所に居ると思いますよ。」

あなたの気持が兄貴に届くことを祈ってます」

「ありがとう……」

私は刀次に背を向けて走りだした。
一刀にこの気持ちを伝える為に……

刀次 side

「兄貴にも困ったもんだな……」

あんな可愛い子を悩ませる位好きに
させるんだから……

「まあ、流石俺の兄貴って言ったらそれまでかな？
あゝあ、俺も彼女欲しいな……」

兄貴程居なくても良いから愛する人一人位な……」

俺はそう言って誰も居ない会議室から
出て行った。

苟？さんの恋の成就を願いながら……

八話 素直になれなくて（前篇）（後書き）

いやゝ刀次君優しいですねゝ

刀次君みたいな子に彼女が出来て

欲しいもんですゝ

……誰にしようかな……？

何も言つてませんよ？

では、次回で一刀と桂花の恋の成就が

出来るのかを見ましようか。

なるべく今日じゅうに上げますので。

九話 素直になれなくて（後編）（前書き）

こんにちわ

『素直になれなくて』後編でございます。

桂花がデレますが文句は言わないでください
私の心は弱いので……

さて、一刀君がどうやって桂花を

口説くのか興味がありますね

では、始まり

九話 素直になれなくて（後編）

一刀side

中庭

「ふっ！はあっ！おらあっ！」

俺は会議が終わった後華琳を部屋に運んで
特にすることが無いので庭で鍛練をしていた。
鍛練と言っても大したことはしてない。

ただ刀を振っているだけ。

でも、鷺はそれだけでも良いって言ってたしな

「今日はこれ位で良いかな？」

俺は刀を鞘に戻して。

部屋に戻ろうとする。

だが、音が聞こえて

立ち止った。

「これは、誰かが走って来る音か？」

こっちに近づいてくる？

誰か急いでるのかな？

そんな予想を立てている間にも

音はどんどん近付いてくる。

そして、その音の主は俺の予想を遥かに超えていた。

「……桂花？」

そう、音の主は桂花だった。でも、どうして桂花が？

桂花は俺を見つけると

俺に無言で近づき

「ついて来て……」

そうとだけ言っただけで俺を引っ張っていく。

俺はと言つと何が何だか分からず混乱して何も言えなかった。

一刀の部屋

桂花に連れられて来たのは俺の部屋だった。

「桂花？どうしたんだ？」

俺は桂花に近づいて訳を聞いた。すると、桂花はゆっくりと話してくれた。

「一刀、私……私、一刀のことが……好きなの」

「え？」

今桂花は何て言った？好き？

誰を？俺を？いつも俺を罵倒したり

如何にも嫌いだって言うオーラを

出してた桂花が俺のことを好き？

マジで？

「あなたが居なくなつて私は泣いたわ……

あなたが居ないこの部屋で……

最初の内は確かにウザイ奴だつて思つたわ。

華琳様と歩いている時も何であんな奴が

華琳様と……つて思つた時もあつた……

でも……いつからか分からないけど

あなたが華琳様と歩いてると

何で私と歩いていなんだろうつて

思うようになってきて……

そこから、私を笑顔で見てほしい

そんなことも思うようになったの。

私のことも好きだと言つて欲しい様になつたの……

言い訳をするつもりじゃないけど

いつもあなたに悪戯をしたのは構つて欲しかったからなの……

一刀、今なら言えるわ……

大好き……」

そう言われて俺は桂花の気持ちを考えてみた……

今まで俺に悪戯をしてきた桂花。

でも、それは俺の気を引く為だった……

この子は勇気を出して俺に告白してくれた……

今度は俺がこの子の気持ちに答える番だ……

そう思い俺は桂花を抱きしめた……

「一刀……」

「俺も桂花のこと好きだよ……」

ありがとう……勇気を出して告白
してくれて……」

桂花は震えながらも俺のことを抱き返してくれた……

「一刀……ありがとう」

俺は桂花の顔を見た。

桂花は綺麗な涙を流していた……

「桂花、俺は一生桂花を愛すると誓うよ……」

「一刀……私も誓うわ」

俺達は誓いを立てて唇を近付けた……

そして、唇と唇が重なった……

九話 素直になれなくて（後編）（後書き）

今回は短いですが桂花と一刀君が
結ばれたから良いんじゃないですか？
ちょっと強引だった気はしますが……
では、また次回。

十話 五胡の使い（前書き）

こんにちわゝ

前回は一刀君と桂花が結ばれて良かったゝ
って思う私が居るんですよゝ

まあ、結ばれなかったら一刀君は
死んでも良いかもしれませぬゝ

あれ？一刀君何をしにきたんですか？

一刀「……………」

あれ？刀を構えて何を……

ぎゃあああああつ！

正論でしょおおおおつ！？

一刀「じゃあ、皆俺は駄文作者を

追いかけるけど始まりコールは

俺がやるから。

では、始まりゝ」

取らないですよ！

ぎゃあああああつ！

十話 五胡の使い

「んん……もう朝か……」

起きて隣を見る。

そこには昨日俺のことを

好きだと言ってくれた桂花が居た。

まあ……何をしたかってゆう質問は
野暮だからしないでくれ……

「んん……かずとお……」

くっ！可愛い！可愛過ぎるっ！

この寝顔は華琳の上目遣い並みに
可愛いぞ！

一体桂花はどうしたというのだ！？

華琳の上目遣いでも襲いそうに
なったのにこのままじゃ……

俺が煩惱に負けそうに
なっていると桂花が目を開けた。

「んん……一刀？」

「あ、ああ！おはよう！桂花」

「ええ……私達本当に結ばれたのね」

「ああ、俺達は本当に結ばれたんだ」

「一刀、好きよ」

「俺もだよ、桂花」

ゆつくりと唇が近づき……

でもな皆、俺の忠告覚えているかい？

こう言う時には邪魔が入るって

言う忠告さ……

やっぱりこう言う時って

邪魔が入るんだよな……

「北郷！今す……ぐ……」

「……………」

「……………」

「……………」

三人の間で流れる嫌な沈黙。

あれ？春蘭から殺気が……

一応國邸を取っておく。

すると、春蘭の殺気が

一気に膨れ上がっていく。

「北郷！死ねえええええっ！」

俺は桂花を巻き込まない様に
春蘭をぬいて部屋の

「何で！？俺春蘭の気を害することした！？」

「うるさい！何故帰ってきて華琳様と最初に肌を重ねるならば分かるが何故帰ってきて一番に肌を重ねたのが桂花なのだ！？」

「もう華琳とは肌重ねたし！？（拠点話 華琳の後に肌を重ねました）」

だから一番は華琳だから剣を収める……！」

俺が華琳と肌を重ねたことを言えば何とかなるって思ったが……

「うるさい！ならば華琳様の後に何故私達ではないのだ！私はまだ怒ったのだぞ！」

見れば分かるって！

くそ！春蘭は完全に怒りに我を忘れてるし……

國邸を抜くか？

いや……流石にそれは不味いか……でもこのままじゃな……

そこで刀次が歩いている

姿が目映る。

刀次は俺が春蘭に斬られそうになっているのに気がついたのだろう刀次が走ってくる。

「兄貴！？どうしたんだ！？」

「いや、いろいろあつてな……」

「やっぱりこう言う時って気絶させた方が良いのか？」

「そりゃあ、そうだろ！」

「あ、でも不味いかも……」

「は？どう言うことだ？」

「今ちよつと来客が来ててさ……」

「玉座に居るんだよ……」

「流石に曹操の片腕が居ないと不味いだろ？」

「ああ、そうだな。」

「でも、どうするか……」

「北郷！随分余裕だな！これならどうだ！？」

「俺がそんなことを考えていると」

「俺が余裕でかわしているのが」

「いらついたのか攻撃が激しくなってきた。」

「おわっ！？刀次、そろそろ止める方法を考えてくれ」

「はあ、夏侯惇。兄貴が死んだら華琳が悲しむぞ」

「むう……ならばしょうがない……」

春蘭はそう言っ て剣を収める。

「ありがとよ、刀次」

「応！」

「でも、春蘭は何しに来たんだ？」

俺がそう言っ と春蘭は思い出した様な顔をして

「おお！そうだ！玉座に

五胡の使者が来たのだ！」

「五胡の使者が！？一体どうして！？」

「それは俺も言おうとしてたんだよ。
でも、考えてみたら貂蟬の持っ てきた
情報 が正しいんじゃないかって思っ たんだ」

「五胡が俺達に降るっ て言っ 話か……」

五胡に何の利益があるか知らないが……

「まあ、さっさと行かないと曹操に
どやされるぞ兄貴」

「それは勘弁だな」

俺は部屋に入って桂花の方を向き

「桂花、今すぐ玉座に……」

「聞いてたわ。

行きましょう」

「ああ」

俺達は玉座に向けて歩き出した。
不安を胸に抱きながら……

玉座

玉座に着いた俺達兄弟は
春蘭達と共に
華琳に左右を守れと言われたので
華琳の左右でいつでも抜刀出来るように
臨戦態勢を取っていた。
もちろん殺気は隠しているから
俺達並み奴が見ない限り俺達はただ華琳の
左右を守っているだけだと思はずだ。
因みに貂蟬と卑弥呼は姿を隠して玉座の
どこかに居るらしい。

「一刀、この時期に来るのは……」

「ああ、貂蟬の情報のことだろ」

それ以外には考えられない。
もし違っていて華琳に何か
しようとするならば……

「兄貴、少し落ち着け。
殺気が出てたぞ」

「ああ、悪い……」

俺は刀次の忠告を聞いて心を
落ち着ける。

「兄貴は警戒しすぎだ。
少し肩の力を抜け」

「ああ、そうだな……」

俺は華琳のことになると力が
入りやすいみたいだな……
本当に力を抜かないと……
華琳は大きい声を出して

「使者をお通しせよ！」

桂花がそう言うのと玉座の扉が
開き五胡の使者が叉手の礼を
取り段下に進んできた。

一人は銀髪の子。
もう一人は男。

「五胡の使者の一人。
銀刻翼です」

「同じく剛咲哉でございます」

誰かに似てるな……

誰かだったかな……

……あ！

「金硬翼とその仲間の男！？」

俺は思わず叫んでしまったが

俺が叫んだことにより

その場に居た全員が武器を構えた。

だが、その銀髪の子は別のことで
困惑していた。

「兄のことを知っておられるのですか！？」

「兄？」「」

俺達が首を傾けていると
二人の使者は俺に向かい
質問をしてくる。

「もしかしてあなたが北郷一刀殿で
天の御遣い殿ですか？」

「ああ、そうだけど……」

何でこいつ等は知ってるんだ？
今度は大男の方が

「では、あなたがこの世界の原点なのですね……」

大男がそう言々と貂蝉と卑弥呼が隠れていた
柱の後に隠れていたが身体を出した。
貂蝉と卑弥呼は既に戦闘態勢を取っていた。

「何故、一刀君がこの世界の原点だつて
知ってるのかしら？」

「返答次第ではただでは済まさんぞ！」

「ちょっと、待ってくれ！この世界の原点？
そんなこと言われても意味分かんないぞ！」

「そうですね。貂蝉、卑弥呼。

ここは一刀殿やここに居る方々に
説明するのが我等の義務ではないのか？」

「むう……」

大男がそう言々と貂蝉達は黙って
何も言わなくなってしまった。
そして大男は説明する為に
口を開いた。

「一刀殿、これを説明したらあなたは自信を無くすかもしれませんがよろしいでしょうか？」

「ああ、聞きたいな。」

俺がこの世界の原点って言うのはどう言う意味なのか？

どうして俺はあんた等の兄貴達のに希望って呼ばれているのか？
どんな結果であつても俺は受け入れるさ！」

大男は少し考えて

「よろしいでしょう……あなたがそう言うのであれば我等は貂蟬も卑弥呼も知らない世界のことをあなたにお教えます。」

あなたの罪を……そして

あなたが何故希望と呼ばれているかも……」

十話 五胡の使い（後書き）

こんにちわーいやー時間の延長しすぎてんなー
そんなことより皆さん！フラグが立ちましたよ！
一刀の罪って！？貂蟬も卑弥呼も知らない世界！？
私の話では『恋姫？無双』が原点の話ではなく
その前にもう一つ世界があったと言う設定になって
います。

しばらくその原点の話になるかもですが
よろしく願います。
では、また次回。

十一話 一刀の罰の世界（前書き）

こんにちわ

今日もネットカフェに来て……

しつこいですか？

まあ、良いや……

今回は悲しい原点の世界の

説明です。

この話を見ても一刀君のことを

嫌いにならないでくださいね……

では、始まり

十一話 一刀の罰の世界

「まず、平行世界についてご説明しましょう」

今俺達は五胡の使者が言ったことの
説明を受けている。

「平行世界と言うのは『可能性』の世界です。
可能性があるだけその平行世界はあります。
この世界にもそう言った世界はあります。」

何だ？

俺はその説明を聞いた時

頭に変な記憶が映ってきた……

俺が呉に落ちて呉の為に

尽くしたり……

蜀に落ちて劉備達を先導したり……

劉備が居ない蜀を導いたり……

そんな記憶だ……

そんな世界があったのだろうか？

俺はこの疑問の答えを得る為に

銀刻翼に疑問をぶつけてみた。

「例えば、俺が呉に落ちて呉の
為に尽くしたなんて世界が
あったり蜀に落ちて劉備達を
先導したりそんな世界があったり
劉備が居ない蜀を導いたりした
世界があったのか？」

俺がそう言つと驚いた顔をして銀刻翼は

「思い出したのですか!？」

「え、今俺の頭の中に映つてきた記憶を言っただけだけど……」

「それを思い出したと言つと思つのですが……」

まあ、良いでしょう。

ありました。

最後にあなたが言つた世界が貂蝉達が原点だと思つている世界です」

「違ふのかしら？」

今度は剛咲哉が答える。

「ええ、もう一つあつたです。

その世界は劉備殿も

孫策殿も

曹操殿も居た。

そして、一刀殿は魏に落ちて魏の為に尽くしていた。

反董卓連合の後に

なつても戦いが止まぬことを悩みました……」

華琳は笑って俺を茶化してくる。

「一刀らしい悩みね」

「そりゃあ悩むだろうな……俺優しいから」

「「「は？」」「」」

「そこは肯定してくれ！」

「じゃないと俺、泣いちゃう……」

「よろしいでしょうか？」

剛咲哉は呆れた顔をしている。

「ごめんなさい……続けてください」

「悩んだ一刀殿はある者に相談したのです。」

「誰に？」

もしかして……

「一刀殿を希望と崇めている我等の兄です」

「「「！……！」」「」」

俺があいつ等に？

「兄達はその世界での一刀殿の補助役でした。

一刀殿がその世界に飛んだ時

一刀殿にその世界がどう言う世界なのか

一刀殿が何をするべきなのか説明しました。

一刀殿の役割は大陸を平和にすることでした。

その世界での一刀殿は本当に平和について

考えていました。

ですが、その世界は不幸な世界だったのです……」

「不幸な世界？」

「ええ、いつまでたっても蜀は

平和の為に戦い

呉はただ傍観し戦いを仕掛けられれば

戦い

魏は霸道を進む……

一刀殿は悩み兄達に相談しても

良い答えは帰ってこない……

一刀殿は心を痛めたでしょう

その世界がいつまで経っても

大陸は平和にならない……」

そこで剛咲哉はいったん切った。

玉座に重い空気が流れる……

俺には分かる……いつまでも

平和にならない大陸を見て涙も

流したはずだ……

でも、涙を流しても大陸は平和にならない……そして最後には……

サンゴクノウタチヲコロシタンド

……え？何だ今の……？
俺が三国の王達を……
殺した？何でそんな記憶……

ワカラナイノカ？オマエモオレダロ？

「ぐあああああつ！」

「一刀！？どうしたの！？」

「違う！俺はお前じゃない！」

ミトメロヨオレハベツノセカイノニンゲントハ
イエコンポンハオナジナンダヨ

「認めない！俺が！俺が！華琳達を
殺したなんて！」

「え？銀刻翼！これは一体どうなってるの！？」

「恐らく思い出したのです！その世界のことを！
その世界で一刀殿は悩んだ末に三国の王達を
殺すのです！そうすれば戦を起こす理由は
無くなる！そう考えたのでしよう！

その結果確かに戦は無くなりました！
ですが、その世界は否定され貂蝉達が
一刀殿を支えた世界が原点になったのです！」

「あなたは どうしてそんなこと！」

「我等が否定したからです！」

「なっ！」

「我等は認めたく無かった！平和の為に
考えていた一刀殿が平和の為に愛した者達を
殺す世界を！だから否定したのです！」

「そんなことどうでも良いわー！どうすれば
一刀君は止まるの！」

「今一刀殿はその世界の一刀殿と精神の戦いを
している！一刀殿が勝てば……！」

「負けたらどうなるのじゃ！」

「一刀殿は廃人と化します……」

「そんな！」

「曹操殿！咲哉の言っていることは真実です！
ですが、今は信じてお待ちください！」

「一刀殿は帰ってきます！」

「あなたが信じなければ誰が信じるのです！」

「！そうね……誰か一刀を部屋に運びなさい！」

「はっ！」

「一刀、帰ってきて！」

「??？」

「ここは？」

「そこは誰も居ないただ黒い……」

「闇だ……俺は闇の世界に立っている……」

「ヨウ」

「お前は！」

「振り向いてみるとそこには
『俺』が立っていた。」

「カマエルナヨ。オレはオマエダゾ？」

「俺が華琳を殺した奴を認めると思ったのか？」

「クッククク……オマエならワカッテクレルト
オモッタノニナ」

「誰が分かるか！」

「ナラオマエナラドウシタ？」

「え？」

「オマエナラドウシタトキイテイル。
オマエナラガマンシタノカ？」

メノマエデヒトがシンでイクコウケイヲ
ミナガライツカヘイワニスルカラトイッテ
タミタチガシンデイクノヲガマンシタノカ？」

「それは……」

「ガマンデキナイダロ？ダカラオレハイクサノタネヲ
ツブシタノサ」

「だからって！そんなことは許されない！
平和の為に自分が愛した人達を殺すのは
絶対に許されない！」

「ジャア、オマエナラドウシタンダ！」

イクサノタネヲツブサズニオマエハドウシタンダ！」

「俺は悩むさ！最後まで悩んで悩んで悩みぬいて……途中で逃げ出すことはしない！」

お前は逃げたんだ！悩んで出した案でも効果が無いから苦しんでもう苦しむのが嫌になって！だから逃げたんだ！」

「ウルサイ！オレハサイゴマデナヤンダンダ！ナヤンダノニ！」

「じゃあ！何で華琳達を殺したんだ！愛する者を何故殺した！」

「グウウウウツ！」

「お前は逃げたから殺したんだ！」

「グアアアアアツ！」

俺の説得で『俺』は膝をついた……

俺は膝をついた『俺』に手を差し出した。

「ナンノマネダ？」

「お前の苦労は分かった……

お前の意思も。

だから、俺はお前の平和に
対する意思を継いでいく……」

『俺』は俺の手を取り

「デキルノカ？ミチハナガイゾ」

「長くてもやってやるさ。

だから、安心して逝ってくれ」

そして『俺』は微笑んで

「ありがとう、やっと俺呪いが解けた……

お前達の敵で俺の友である

迅、清、葆は俺の意思を継いでいる。

恐らく、三国の王達が居れば絶対に
戦が起こると思っているのだろう」

「俺が希望というのは？」

「お前は俺と根本的な部分で同じだからな。
俺の意思を継いでくれると思ったんだろう」

「そうか……じゃあ、あいつ等には

悪いことになるな……

そうだ！あいつ等以外にも仲間が居るかも
しれないんだ！」

そう、天下一品武道会であの女が言っていた。

『あと三、四人は連れてきたかった』と。

この言葉から仲間が他に居るのが
明らかだ。

「知らないが……あいつ等が言ってたんだ。
俺の意思に強い意志に賛同した奴等が居るって」

「そいつ等が？」

「間違い無い。気をつけろよ」

「ああ」

「さて、そろそろ時間だ」

『俺』がそう言つと華琳の声が聞こえる。

『一刀！帰ってきて！一刀！』

「華琳……」

「頑張れよ……俺が出来なかったことを
やってくれ……」

「ああ、またな……」

俺がそう言つと闇が一気に眩い光が辺りを包み『俺』が
見えなくなった……

一刀の部屋

「一刀！帰ってきて！一刀！」

「隊長！帰ってきてください！」

「隊長！死んじゃだめなの！」

「隊長！お願いや！帰ってきてや！」

「兄様！帰ってきてください！」

「兄ちゃん！帰ってきてよ！」

「お兄さん！お願いします！」

「一刀殿！どうか帰ってきてください！」

「一刀！帰ってきてや！」

「一刀！私達はまだ結ばれたばかりじゃない！帰ってきて！」

「兄貴！帰ってこい！」

皆の声が聞こえる……

皆が俺を呼んでいる……

起きないとあの世でうるさい

だろうな……

起きるかぁ、皆の為に……

「皆……」

俺の心とは裏腹に声はあまり出なかった。

でも、皆を安心させるには十分な声だった。

「一刀（隊長）（兄ちゃん）（兄様）（お兄さん）（一刀殿）（兄貴）！？」

「悪い……心配させた」

俺は身体を起こそうとするが身体が言うことを利かない。岩の様に堅い。

でも、皆俺のが起きたことを知ったからか笑ったり

泣いたりしている。

「兄貴、大丈夫か？」

「身体が岩みたいに動かないな……」

「そうか、でもしばらくしたら大丈夫だろ」

「そうかね……」

「ところで兄貴？」

「何だ？」

「帰ってきたってことは勝ったのか？」

「勝ったってよりもなあ……まあ、良いや
少し長いけど話すよ」

俺は『俺』と話したことを全て話した。

「つとここまでが俺が『俺』と話したことだ」

「「「
……」」」

「何で皆黙るんだよ？」

「そりゃあ、何と言うか……」

「やっぱり、一刀だって思っただけ」

「そう！流石曹孟徳！」

「ふふつ、ありがとう」

「???」

「分からなくて良いわよ。

今はゆっくり寝なさい。

良いわね」

「分かった、お休み」

「お休みなさい、一刀……」

俺は皆の笑顔に見送られながら夢の中へと
旅立っていった……

十一話 一刀の罰の世界（後書き）

皆さんどうだったでしょうか？

一刀君達の戦いはまだ始まったばかり……

一刀君達の行く末を私達でゆつくりと
見送りたい。

ではまた次回。

拠点話 華琳（前書き）

こんにちわ

今日は前回書きませんでした

拠点話にします。

と言っても十二話の話を考えていなくて
時間稼ぎです……

あ、今回は後書きをちゃんと

読んで頂きたいんです。

では、始まり

拠点話 華琳

別の世界の『俺』と精神の
戦いをした俺は華琳より
休息を与えられていた。

本当は仕事をしたかったんだが秋蘭に

『華琳様より休息が与えられているだろう？
だから、休んでいる』

と、仕事をさせてもらえなかったり。
鍛練をしようと庭に行けば刀次に

『兄貴は根を詰め過ぎだ。たまには休むことを
考える』

と鍛練を止められる始末だ……
だから、俺にはすることが無い。

「……散歩でもするか」

散歩でもしてたら誰かに会えるだろう。

もしかしたら、暇な誰かと会えるかもしれない。

俺は國邸をベルトに差し込んで自分の部屋から出た。

庭

とりあえず俺は庭に来た。
さつきとは違い刀次は居ない。
だが……

「あそこに居るのは華琳達か？」

刀次が居ない代わりに庭には
華琳と春蘭、それに秋蘭が居た。

「お茶を飲んでるみたいだな……」

この暇な時間を好きな人と過ごすんなら
時間は長い方が良い。

むしろ今日が休みだと言うことに

感謝だな……

俺は華琳達に手を振る。

「おい！華琳！」

華琳もそれに気付いたようで
笑顔で手を振ってくる。

「一刀！」

くううううっ！可愛いなあ。

俺は華琳を襲いたくなる本能を
抑えながら華琳達のところへと走りだす。

「一刀、どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよ……

仕事は秋蘭に止められるし

鍛練は刀次に止められるしで

暇なんだよ……」

「ふふつ、たまには良いじゃない」

「休みにはすることが無いんだよ……」

「あら、それなら私達三人があなたの閨に行つたのに」

華琳がそう言つと春蘭と秋蘭が顔を赤くする。

「華琳、俺はそこまで性欲は強くないぞ？」

「」「嘘つ！？」」「」

「嘘じゃないよ！？」

そこで驚かれると傷つくんだけど……

「ふふつ、あなたなら私達三人を相手出来るでしょ？」

「知らないよ……」

「北郷なら出来そうだな」

春蘭が意地悪な顔をしたので

俺も仕返しをする。

「春蘭が部屋に来てもしばらく相手しない」

「許してくれ！北郷！」

「ああ、姉者は可愛いなあ……」

姉馬鹿め……

「北郷、何か失礼なことを思わなかったか？」

秋蘭は俺にお茶を出しながら俺をジト目を向ける。

「そんなことは無いよ」

『そんなことあるよ』なんて言ったら間違いなく俺の頭に穴が開いてただろう。本当に危なかったな……

「そうか……あ、美味しい」

「だろう。この店はなかなか良い店なんだ」

「秋蘭が褒めるとはね。華琳も認めてるの？」

「ええ。秋蘭にはちゃんとお礼はしたわよ」

華琳がそう言っていると秋蘭が顔を赤くする。

「か、華琳様！お戯れは……」

「あら、ごめんなさい」

華琳は下を出して笑顔で謝る。

本当に可愛いなあ……

「ふう、そう言えば華琳達は暇なのか？」

「暇と言う訳では無いけど……あなたの相手をする位の時間ならあるわよ？」

「ははっ……」

俺はその場から離れる為に一步後ろに下がるが……

「春蘭！」

「御意！」

「え？しゅ、春蘭！離してー！ー！」

「ふふっ、楽しもうではないか、一刀」

「姉者の言う通りだぞ」

「一刀、楽しみましょう」

その後、俺が何をされたのか……

あえて、言わない……

言いたくない……

ただ、言えるのはその後俺の声を聞いて
魏の武将と軍師が俺いじりに参加したと
言うことだけだ……

拠点話 華琳（後書き）

前書きで書いたことですが

実は『三人の天の御遣い』の方が

なかなかお気に入り、の件数が増えないと

言いますか……

原作壊すとか書きましたが全然壊していませんし

原作のセリフをパクッてますし……

最近『三人の天の御遣い』を打ち切ろうかと

思ってしまうのです……

『やめないで欲しい』↑こんな感じの

コメントが十件位あればいいのですが……

一応日曜日まで待つてみます。

『三人の天の御遣い』にちゃんとコメント

をして頂いてる方々や更新を待つてくださって

いる方々には申し訳ありませんが……

では、また次回。

拠点話 桂花（前書き）

こんにちわ

従兄にパソコン預けたらもう帰って
来ましたよ

それと、前回『三人の天の御遣い』
を打ち切ることに關してのコメントが無かったん
ですよ……

まあ、そんなに早くコメントが
くるなんて思っていました……

今回は桂花の拠点話です。
では、始まり

拠点話 桂花

「一刀！次はこっち！」

「ちょっと、待ってくれ！」

俺は今全ての男が夢見ることをしている。

それは可愛い子とのデートだ。

始まりは約一時間前桂花が俺の部屋に訪ねてきたところから始まる。

約一時間前

「ごめんもう一回言つて。聞こえなかった……」

「もう！恥ずかしいんだから一回で聞いてよ！」

顔を赤くしながら桂花がポコポコ殴ってくる。

痛くはないけど可愛い……

はっ！俺は何を思っているんだ！

別に桂花はそう言うことをしたいと言っている訳じゃないんだぞ！

「一刀？大丈夫？」

心配そうな顔も可愛い……

……自分が嫌になってきた……

「大丈夫、桂花に逢引きに誘われたのが嬉しくて……」

「そ、そう……なら早く行きましょう」

「ああ」

俺は準備をして桂花に振り向いて

「行こうか」

「ええ」

その笑顔が可愛いと思って自己嫌悪したのは内緒だ。

そして今に至る。

逢引きを始めてから服を買ったり
歩いたり……

流石に華琳並みに服は買ったりはしないから
俺の負担が少なくて助かる。

勿論俺が荷物を全部持っている。

「桂花、次は何を買うんだ？」

「次は本を買おうかと思って……」

「本か……店は決まってるのか？」

「ええ、この先の角を右に曲がった所よ」

「じゃあ、行こう」

「ええ」

そう言つて桂花は角を曲がつて行く。

「あ、ちよつと待つてくれよ！」

「あ、そうね」

桂花はそう言つて俺の近くに来る。

そして、俺の手を握つて顔を赤くし

「これなら良いでしょ？」

ああ、分かる……俺の顔もすごく赤い……

だつて、まだ彼女になつて間もない彼女が
手を握つてくるんだぜ？

顔も赤くなるだろ？

それが男だろ？

「一刀、顔が赤いわよ？」

桂花は悪戯な笑顔をして俺に余計近づいてくる。
うつ……一年前には無かつた胸が……

「一刀、今昔には無かつた胸が……とか
思わなかつた？」

「思つて無いよ！そつだ！何の本を買つんだ！？」

苦し紛れの言い訳だ。

だが、桂花は顔を赤くする。

俺何か桂花が顔を赤くするようなこと
言つたか？

「あゝ……桂花？別に恥ずかしいんなら言わなくても……」

「……………書」

「へ？」

聞こえた。でも、何かの間違いだと思つて
もう一度聞く。

「性技指南書！」

「……………えゝゝゝっ！」

「声が大きいわよ！」

「いゝ、ごめん！でも、何で？」

「あうう……………えつと……………」

桂花はどっかの神様みたいになつて
おろおろする。

その様子も可愛い……………

自己嫌悪三回目……

俺が自己嫌悪に浸っている
間にも桂花はおろおろしている。
そして、諦めたのか口を開く。

「一刀ともつと行為を楽しみたいから……」

「……そうか、ありがとう」

俺はそう言いながら俺は桂花の頭を撫でていた。

「あうあう……」

本当にどっかの神様みたいだな……

本当に可愛い……

自己嫌悪四回目……

俺今日だけで何回自己嫌悪をすれば良いんだろう……

まあ、良いや……もう開き直った……

「さて、早く買いに行こうか」

「ええ……ねえ」

「ん？」

「性技指南書を買ったら夜までに
勉強を終わらせるから今日私のこと……」

「ああ、夜に部屋において……」

「ええ……」

俺はその時桂花の笑顔を見て
本当に可愛いと思った。

その時自己嫌悪はしなかった。
本当に桂花が可愛かったから……

拠点話 桂花（後書き）

一刀君め！羨ましいー！
こんな思いを出来るなんて！

……失礼しました……取り乱しました……
次回は本編を上げようかと思っています。
では、また次回。

十二話 兄弟の絆（前書き）

こんにちわ

実はですね、『三人の天の御遣い』をやめて欲しく無いってコメントが

集めてきたんですよ。だから、やめずに頑張ろうかと思っています。

駄文な上に計画性はありませんが、『三人の天の御遣い』もよろしく願います。

勿論『希望と絶望を持つ御遣い』も頑張りますよ。

今回はちよつと拠点話っぱいですが拠点ではありません。
では、始まり

十二話 兄弟の絆

「……迅達は俺の説得に応じてくれないのかな」

誰も居ない夜の城壁の上に俺は酒を飲みながら
迅達のことを思っていた……

別の世界の『俺』と精神の戦いが終わった時
俺は迅と過ごした時間を思い出した。

だから、迅達がどれだけ俺の理想を思ってくれて
いたのか分かった。

だから、俺の新たな理想を受け止めてくれないか
そう、思っているのだ。

迅達が俺の新たな理想を受け止めてくれば
俺の……俺達の理想は必ず叶うから……

「迅……清……俺、話がしたいんだ……」

久々に……でも、お前達は多分俺の理想を
受け止めてくれないだろうな……」

元は俺が抱いた理想……

俺の責任……

だから、俺が何とかしなくちゃいけない……

でも……やっぱり俺は迅達と戦いたくない……

俺の中に矛盾した理想が渦巻いている……

俺は……俺はどうしたら良いんだ……

そんなことを思いながら酒を飲む。

すると、後から声を掛けられた。

「兄貴はそんなことで諦める様な奴じゃないだろ？」

「刀次……」

俺に話し掛けたのは俺の弟である刀次だった。

「兄貴は金硬翼のことをどう思ってるんだ？」

「どうって……大切な仲間だよ」

「だろ？なら最後まで諦めんなよ。」

別の世界の『兄貴』にあわせる顔がなくなるぜ？」

「……そうなんだよなあ」

「兄貴は何をそんなに悩んでるんだよ？」

「迅速と戦わなきゃいけないんだよな？」

「そりゃ、そうだろ」

「そうなったら、お前どうする？」

「そりゃ……！兄貴……兄貴は金硬翼達を殺したくないんだな？」

「ああ……」

女々しいことだとは思ってる。

でも、俺は……俺は……！

俺の心の中を見通す様に

刀次は俺に語り掛ける。

「兄貴はそれで良い……そう言うところに
曹操達は惚れたんだろうから」

「刀次……」

「兄貴は優し過ぎるんだ……
でも、それで良いんだ……
兄貴はそう言う奴なんだから」

「……ありがとな！刀次！
俺は頑張るよ！迅達は死なせない！
皆も守る！俺はその為に強くなつたんだ！」

「おう！それで良いんだ！
曹操にそう言つとけ！夫の願いなら
聞き届けてくれるだろ！」

「ああ！今から言ってくる！」

「おう！ついでに楽しんで来い！」

「喧しい！」

俺はそう言いながらも笑顔で華琳のところに向かった。
迅達を死なせない様に願う為に……

刀次 side

「ふう……世話の掛る兄貴だぜ」

本当に兄貴は優しい……

兄貴を傷つけるのはその優しさだ……

でも、兄貴はその優しさを抱いて生きていかなくても
ならない……

「つても兄貴が優しさを捨てることは
無いか……あんたもそう思うだろ？」

……金硬翼」

俺はそう言つて後ろを向く。

そこには金硬翼が居た。

「いつから？」

「最初から……俺は兄貴が来る前から
ここに居たんだよ。」

兄貴が来たからちよつと気配消して試して
みたけど兄貴は気付かなかつた……

あんたは兄貴がここに來た時から居ただろ？」

「はあ……降参だ」

金硬翼は両腕を降参のジェスチャーをする。

「あんた、なかなか俺の兄貴のことを
思ってくれてんだな」

「当たり前だ。俺は一刀の親友だったんだぜ？
別の世界でもそりゃ一緒だ。

それより良いのかよ？ 敵が目の前に居るんだぜ？
斬らなくて良いのか？」

「俺の一存であんたは斬れねえーよ。
それとも、俺に死ねって言うのかよ？
あんたを斬ったら俺が殺されるぜ……」

「ふつ、一刀ならそうするだろうな」

「はぁ……まあ、良いい……
俺は何も見なかった……」

俺が話してたのはあんたの弟だ」

「颯か……」

「ああ、誰にも気付かれ無い様に帰れよ」

「ああ、今度は戦場でな。

あと、俺のことは迅で良いぜ」

「おう。じゃあな迅」

俺がそう返事をした瞬間迅は一瞬で霧になって消えた。

「ふう……さて、今頃兄貴は曹操を説得してるか……
それとも、楽しんでるか……ま、どっちでも良いけどな」

兄貴が笑顔で生きていればそれで良いんだ……

十二話 兄弟の絆（後書き）

迅も良い人ですねゝ

やっぱり、親友だってこともあるんでしょうか……

それに刀次も良い弟ですよゝ

こんなに良い兄弟が居たらどんなに良いことか……

では、また次回。

十三話 一刀と刀次の実力（前書き）

こんにちわ

今回は戦闘シーンになります。

…… 上手く書けるかな……

出来る限り頑張ります！

では、始まり

十三話 一刀と刀次の実力

「やっと、終わったー！」

今俺は休息が終わったことにより
華琳から押しつけられた仕事を
こなし今やっと終わったところだ。
時間を潰せるものがあるってやっぱり
素晴らしい！

さうて次は何をしようかな

コンコン

「どうぞ。開いてるよ」

「失礼するぜ、兄貴」

そう行って入って来たのは
俺の弟の刀次だった。
何をしに来たんだろう？

「何をしに来たんだ？」

「兄貴、もう休息終わったんだろ？
だから、一緒に鍛練でもしようかなって
思ってたんだよ」

「前に俺が鍛練をしようとした時に止めたくせに？」

あの後は大変だった……思い出したくない……
あれは夢だ！あれは夢だ！夢なんだー！

「しょうが無いだろ？兄貴は根を詰め過ぎなんだから
少しは休まないと」

「自分の兄貴が頭抱えてるのに心配しないのは
どうかと思うぞ？」

「悪い悪い。早く鍛練に行くぞ」

「ああ、分かったよ」

何だかんだ言っても鍛練は楽しいからな。

……俺春蘭みたいになってないよな？

「なっていないと思うぞ」

「兄貴の心を読むな。全く……」

俺は壁に掛けてあつ國邸を取りながら
溜め息をつく。

「読めるんだから仕方ないだろ……さっさと行くぞ」

「ああ」

庭

「兄貴、先客が居たみたいだぜ」

「あ、ほんとだな」

そこには霞と……あれ誰だろう……知らない子だな。
霞はこっちに気付いた様でこっちに手を振ってくる。
俺もそれに答え手を振る。

「一刀と弟さんやん！どうしたんや？」

「このところ兄貴は鍛練しなかったからな。
兄貴の腕が鈍らないように鍛練してやるんだよ」

「随分偉そうだな……覚悟しとけよ？
間違って心臓に俺の剣が刺さるかもしれない
からな」

「あ、兄貴？冗談だぜ？冗談……」

「ふっ、分かってるさ。それより
霞、あの子は誰なんだ？俺は知らないんだけど……」

俺は霞のことを待っている子を
指して言った。

「そうやったね。一刀には紹介まだだったわ。
おい！恋〜！こっち来いや〜！」

霞を待っていた子は霞に呼ばれ

こっちに来る。

「紹介するわ。この子は呂布や」

「「はい？」」

今このお方は何て言いました？

確か呂布とか聞こえましたが……

「はははっ！流石兄弟やな！全く反応が同じや！」

「「いやいやいや！この子が呂布？」」

「そや」

「「マジで？」」

「マジや」

「（兄貴！とんでもない奴が俺達の前に居るぞ！）」

「（おう！全くだ！こんな子が呂布とは！びっくりした！）」

「どうしたんや？」

「いや、何でも無い……さ、刀次！早く始めるぞ！」

「お、おう！」

「なあ、一刀」

「ん？何だ？霞」

「うちら、一刀達の鍛練見ても良い？」

「え？」

どうして霞はそんなことを言うのだろうか？

俺達の鍛練なんか見ても詰まらないだろうに……

「一刀がどれだけ強くなったかみたいねん。

それに弟さんも誰だけ強いか……

どれだけ強くなれば一刀達の隣を歩けるようになるか……知りたいねん」

そうか……霞は俺のことを思ってくれてたんだな……

「良いよ。見てても詰まらない物だけど……」

俺がそう言つと霞は一気に晴れやかな笑顔になって俺に感謝の言葉を言った。

「ありがとな！そや！皆も連れてくるからちよつと待っててくれや！」

「え！ちよ！」

「ほな！」

俺が止める前に霞は一気に走って俺達の前から

消えて行ってしまった……

「兄貴……」

「言っな……言いたいことは分かるから……」

「……」

そう言えばこの子と自己紹介するのを忘れてたな……
俺は呂布の方に手を伸ばして

「初めまして、俺は北郷一刀、真名は無いから
一刀って呼んでくれ」

呂布は俺の手を握って

「……恋」

「それって真名だよな？」

「……霞も許してた」

「あ、そう言うこと……
刀次も自己紹介しろよ」

「ああ、俺は北郷刀次、兄貴と同じく
真名は無いから刀次って呼んでくれ」

刀次も恋に手を伸ばす。
恋は手を握って

「……刀次も恋のこと恋で良い」

「おう！ありがとな！恋！（なでなで）」

「……（／／／）」

「ん？顔が赤いな。大丈夫か？」

「……（コケン）」

「そうか。なら良いぜ」

刀次の鈍さにも困ったもんだな……

ん？今どこからか『お前が言うな』って
声が聞こえたけど気のせいかな？

「一刀！帰ったで！」

「おう！お帰り！」

俺達が恋と自己紹介してるところに

霞が三国の武将と軍師を連れて帰ってきた。

……ってちよつと待て『三国の武将と軍師』？

ってことはあの短い間に霞は全員を探して連れてきたのか？

「神速の名が付いたうちをなめたらいかんで」

心を読むなよ……

「北郷！早く始める！」

「春蘭は何でそんなに興奮してるんだ？華琳」

「さあ？あなたがどれだけ強くなったかみたい
のでしょう？」

「霞みたいなことを言うなよ……」

「ふふつ、早く構えなさい。
私が立会をしてあげるから」

華琳は俺の近くに来て
俺に耳を貸せというジェスチャーを
してこう言った。

「（勝つたらご褒美をあげるわよ）」

きたーーーー！ご褒美きたーーーー！
勝ってやる！絶対勝ってやる！

「刀次！俺は絶対勝つからな！」

「はあ……兄貴……まあ、良いぜ」

刀次が軽蔑の視線を俺に向けてるが
気にしない！今の俺は華琳でないと
止まらない！

「両者構えなさい」

俺は抜刀術の構え、刀次は抜刀して特殊な構えは取らない。

「弟でも加減はしないぜ？」

「兄貴でも加減はしないぜ？」

「では、始め！」

華琳の始まりの合図と共に
刀次が向かってくる。

「おらああっ！」

「はっ！」

俺は刀を素早く抜いて刀次の銀邸を薙ぎ払う。

ガキンっ！

「っ！やばっ！」

刀次はすぐに後に逃げようとする。
気付かれたか……だが

「抜刀術一の型『双龍爪』！」

薙ぎ払った刀の刃を返し先ほどとは逆方向に薙ぎ払う。
だが、刀次がこれに当たる訳もなくかわす。

「あぶねえ……今のはちょっと危なかった……ぜ！」

刀次がまた向かって来た。

俺的にはまた、抜刀術を使いたいが
間に合わない、今度は……

「奥儀一の型『左龍爪』！」

左斜め上から斬り下げる。

刀次は今度は避けることはせず
受け止める。

ガンッ！

「ぐっ！だが、隙あり！」

刀次は銀邸を突き出してくるが
俺は一回転してかわし刀を鞘に戻す。

「はっ！ヤバイ！」

刀次はすぐに後に逃げる。

だが、これで俺は抜刀術が使える様になった。

「ふう、冷や汗かいたぜ……」

「漆黒を薙ぎ払えば良かっただろうに……」

「そんなことをしたら兄貴の抜刀術で折られてただろ？」

今度は本気出してたっぽかつし」

「じゃあ、さっき俺が双龍爪を使った時は？」

「冒険なんてするのは嫌だし」

「流石だな」

「当たり前！」

「今度は俺からな」

「へ？」

抜刀術縛りで行こうかと思ってたけどやめた。

刀次にはそれじゃ勝てない……

俺は國邸を抜き静かに息をする。

一切の邪心を無くす為に……

「すー……すー……すー……」

「兄貴がそうするなら俺は……」

刀次は抜刀術の構えを取る。

そして、俺が準備を終わり……

「行くぞ、刀次」

「ああ、来いよ」

俺は走って國邸を薙ぎ払う。
それと同時に刀次の双刀が
襲いかかる！

「……………」

「……………」

そして、華琳の勝者を告げる声上がる……

「勝者！北郷一刀！」

俺の刀は刀次の腹から一c m程
刀次の刀は俺の首から二c m程
その違いは俺達のレベルになれば
明らかだ。

「あ——！負けた——！」

刀次は刀をしまつて全力で悔しがってしまった

「当たり前だ！俺にはご褒美がかかってたんだぞ！」

「……何で兄貴の邪心が静かに息をただけで
消えたのか分からなくなった……」

「ふつ、分からなくて良いのだよ……」

「はぁ……………」

俺達がそんなやり取りをしていると
皆が走ってきた。

「北郷！強くなったな！」

「姉者の言う通りだ！本当に
強くなった！」

「全くなの〜！」

「隊長があそこまで強くなるとは……
我々も自分を鍛えなくては……」

「兄ちゃん強すぎだつて！」

「兄様強すぎです！」

「……刀次、本当のことを言っても良いの
だろうか……」

「良いんじゃない？」

「ん？何のことだ？」

「あれは本気じゃない」

「「「……はい？」」」

「本気だったらこの庭なんてぶっ壊れてるつて。
いや、それはなまぬるいな。この城もぶっ壊れてるな」

「そうだな。あれ？皆？」

「「「……………」」」

三国の王達と武将と軍師が固まってしまった。
皆放心状態だ……

俺達は何か言ってはいけないことを言ったかな？
取りあえず皆を起こさないと……

「皆？おゝい皆〜！皆！」

「「「はっ！」」」

やっと目覚めた！

「皆大丈夫か？」

「魏は何とか大丈夫よ」

「呉も大丈夫よ」

「蜀も大丈夫です」

「良かった〜！」

もし、起きなかったら本当にどうしようかと思っ
たよ……

「しかし、本当に強くなったのね……」

「皆を守りたいからね」

「ふふっ、もう私達は超えたのかしら？」

「さあ？分からないよ」

「なら、一生私に尽くすのかしら？」

「それは当たり前だよ」

「一刀……」

「華琳……」

少しつつ唇が近づき……

「兄貴！そう言うことは閨でやれ！」

「「は！」」

周りを冷静になって見てみる……

皆顔を赤くし俯いている人も居る。

ニヤニヤして俺達のことを見ている人も居る。

「悪い！」

「全く……兄貴は……」

「でも、そう言うところが兄様らしいですね」

「流流？どう言うことかな？」

「ご、ごめんなさい！」

「一刀、流流を威圧しないの」

「ごめんなさい……」

「兄貴は絶対尻に敷かれるな……」

「何だと！？」

「怒らないの、ちゃんとご褒美はあげるから」

「まじで！？やったー！」

「……兄貴」

「うるさい！」

刀次には絶対分らないだろう！この喜びを！

「じゃあ、ご褒美の内容を話すから耳を貸しなさい」

「ああ」

俺はしゃがんで華琳に耳を貸す。
そして、ご褒美の内容を聞く。

「……マジ？」

「ええ」

「流石に予想外……てかそんなに俺持たないよ？」

「嘘っ!？」

「本当だよ!」

どうしてそこで驚くんだよ!？

「何て言われたんだよ？兄貴」

「華琳の名誉の為に教えない……」

「まあ、良いんだけどな。大体予想付くし」

「でも、どうするか……俺が持たないし……」

「頑張りなさい」

「……頑張っでどうにかなるのか？」

どうにかなるなら頑張るけど……

「魏の種馬でしょ？」

「……はいはい。頑張りますよ」

もう、その名前は確定なんだな……

「じゃ、解散！」

「「はい！」」

その夜俺が何をしていたのかは
ここでは言えない……言えるのは
後日、俺ははやせ細り
華琳は俺にいつも以上にベタベタ
くっ付いて軍議をしていた……
それだけだ……

十三話 一刀と刀次の実力（後書き）

良いな〜一刀君羨ましいな〜
それに刀次君×恋のフラグが立ちましたね〜
次回はどうしようかな〜……
まだ考えて無い状況です……
ま、頑張ります！
では、また次回。

十四話 抱いた理想の違い（前編）（前書き）

こんにちわ

今日はこれを上げて『三人の天の御遣い』を
上げようかと思っています。

この続きは来週ということで。
では、始まり

十四話 抱いた理想の違い（前編）

「はぁ……………」

これはどうにもならないのか…………？
皆、俺達のことをジト目で見てるし…………

「なあ、華琳……………」

「何かしら？」

「俺の膝に乗るのはどうにもならないのか？」

そう、前回と同じく（七話 三国会議を参照）

華琳は俺の膝の上に乗っている。

正直、皆にジト目で見られるのはちょっと痛い…………
それに俺がこう言う質問をすると…………

「嫌なの…………？」

可愛すぎる！こんなの嫌なんて言えるはず
無いじゃないか！俺にどうしろって言っただよ！

「嫌じゃないよ」

刀次！俺をジト目で見るな！華琳の為だ！

「良かった……………」

だあああつ！もう！可愛いなあ……！
今すぐ閨に連れていきたい位だ！

「兄貴……曹操を閨に連れていくなよ？
軍議中なんだから……連れていくのは
軍議が終わってからだ……」

「分かってるっての」

正直、今すぐ連れていこうかと思ったけど……
すると、桂花が涙目で俺達の方を見ているのが
目に入る。

「桂花、どうした？」

「え！えつと……」

「一刀、桂花も閨に連れていきましょう」
そう言うことが……

「分かった、良いよ」

「ありがとう……」

ああ……！桂花も可愛い……

「兄貴……二人も良いけど他の女も
ちゃんと愛してやれよ」

「おう！刀次にしては良いこと言っじゃないか！」

「はあ……じゃあ、軍議はここまでで……」

「申し上げます！」

刀次がそう言つて軍議を終わらせようとすると
一人の兵が玉座の扉を開いてやって来た。

「何だ！軍議中だぞ！」

刀次がそう言つて兵を叱咤すると兵士が驚愕の事実を言った。

「ここより十里程に大軍を発見！」

「はあ！？数は！？」

「数は二百万！」

「多すぎだろ……！旗は！？」

「金と剛と真！」

「迅と清と葆か……！」

「兄貴……」

「大丈夫だ……」

自分の個人的感情で流されてはいけない……

華琳の近くに居たことで分かったことだ。
俺はその教えに順ずる！

「貂蟬！」

「ここにいるわ〜！」

「今回左慈と于吉は敵なのか？」

「敵じゃないわ。あの時は敵としての役割を
与えられていただけよ」

「早く左慈と于吉を呼べ！」

「はいはい」

そう言うとき貂蟬は時空の扉を創りその中に消えた。

「卑弥呼！」

「はっ！」

「卑弥呼は五胡の使者の二人をここに呼べ！」

「御意！」

卑弥呼はそう言うとき光の如く早さで走って行った。

「用意出来る兵の数はどれ位だ？」

「百万程です！」

「貂蟬に左慈と于吉を呼ばせて正解だったな……」

「兄貴、その二人は一体誰なんだ？」

「二つ目の世界で俺の敵だったが今回は味方だ。」

二人は妖術が使えてな傀儡を生み出すことが出来る。」

「マジ？」

「ああ、だから呼ぶように伝えた訳だ」

「把握。どれ位で来るんだ？」

「大体、一刻程じゃ」

「卑弥呼！」

刀次がそう聞くと玉座に扉が開き

銀刻翼と剛咲哉が入ってきた。

卑弥呼は胸を張って

「貂蟬は我が弟子じゃ！一刻と言わず今……」

「帰ったわー！」

早！そんなに早くしなくても良いのに！

まあ、良いや久しぶりの再会を喜ぶとするか。

「左慈、于吉、久しぶりだな」

「ああ、最初の……いや、二つ目の外史以来だな」

「知ってたのか？」

「貂蟬から聞いたのですよ。それより目が強くなりましたね」

「修行したからな」

「鷺ですか……」

「鷺のことを知ってるのか？」

「ええ、私達の恩人です。」

于吉は昔のことを思い出す老人の様な顔をして上を向く……って本当に老人だな……

「私は老人ではありません！」

人の心を読むなよ……

「まあ、良い。協力してもらおうぞ。もし、断ったら……覚悟しろよ？」

昔のことを思い出して少し意地悪してみたくなった（笑）すると、左慈と于吉は震えて

「（コクコクコクコクコク）」

と、機械の様に何度も首を振っていた。
すると、刀次は呆れた顔をして

「兄貴……威圧してやるな……」

「悪い悪い。昔のことを思い出してつい（笑）」

「兄貴にも困ったもんだ……二人共頼むぞ」

「はい！」

「愛紗ちゃん！御遣いさんって面白いね！」

「桃香様！失礼ですよ！」

「確かに面白いわね」

「姉様！？」

「それにかっこいいし。弟君も」

「お褒めに頂き光栄だよ」

「お？刀次にもついに春が来たか？」

「兄貴！」

刀次は顔を赤くして双刀を抜こうとしている。

全く……そこまで照れることは無いだろうに……

「照れてる弟は置いといて皆出陣準備をしてくれ。五胡の二人は協力してくれるなら銀刻翼と一緒に出陣し、剛咲哉は五胡に協力要請を」

「「御意！」」

「この国の将来を守る為に……行くぞ！」

「「「応！」」」

十四話 抱いた理想の違い（前編）（後書き）

セリフと地の文の割合が……ごめんなさい……
さて、暗くなっても仕方ないから
『三人の天の御遣い』を更新しましょうかね。
では、こっちではまた来週。

十五話 抱いた理想の違い（後編）

俺達は今洛陽の城門の前に居る。
迅達と戦う為に……

「兄貴、大丈夫か？」

「大丈夫だ、俺はもう決めたから……」

俺は最後まで諦めない。

迅達と話して俺達の仲間になってもらう。
その時まで諦める訳にはいかない……

「華琳」

「何かしら？」

「戦を始める前に迅……金硬翼と
話がしたいんだ。駄目か？」

「……分かったわ。やってみなさい」

「ありがとう……」

俺は華琳に礼を言った後前を見た。
迅達が来る方向を……
見えた！

「華琳！」

「ええ、行きなさい」

「ああ」

迅達の部隊

「迅よ、もし、一刀殿がこちらの要求を受け入れなかったらどうするつもりなのだ？」

「戦うしかないだろうな……一刀は一度言ったことは曲げないからな……つても今回は戦わないぜ？今回は自己紹介だけだからな」

「迅、辛かったら今から抜けても良いんだよ？」

「ありがとな、葆。でも、俺は決めたんだよ」

「……迅」

「申しあげます！」

「何だ？」

「前方のに単独で突出してくる影あり！」

「単独だあ！？一体どこの誰だ！」

「あれは……天の御遣い北郷一刀殿です！」

「何！？」

一刀side

俺は迅速と話す為に出ていた。
かつて迅速は俺の意思を尊重した。
だから、今回も俺の意思を尊重して
くれるのでは無いか
そんなことを思っここに居る……

「迅！清！葆！聞け！」

俺は三人に聞こえるように大きな声で叫んだ。
そして出てきたのは原点の世界で三人の中で俺の最も近くで
俺のことを守ってくれた迅だった。

「三人を代表して聞こう！何だ！」

「あの原点の世界での俺は間違っていた！
愛する者を殺して得られる平和なんて真の平和
では無かったんだ！」

「いいや！あの世界での一刀は間違っ
てはなかった！争いの種があったから一刀は
消しただけだ！その行いは決して間違っ
ていない！」

「迅！俺は逃げたんだ！最後まで悩むことを！
どんなに案を立ててもその案は効果が無かった！
でも、最後まで全部やった訳じゃない！
でも俺は最後までやってその最後で効果が無かったら
どうしようって絶望するのは嫌だつて
あんなことをしたんだ！」

「絶望を恐れない奴なんていねえよ！
それに一刀は平和の為に頑張ったんだ！」

「その手段がいけなかったんだよ！」

「一刀は——！」

俺と迅の舌戦、皆静かに聞いていた。
でも、俺達自信が分かっていた。

俺達は絶対に自分の意思を絶対に曲げないって……

「……一刀！絶対に意思を曲げないんだな！？」

「ああ！」

「分かった！ならこれから俺達は敵同士だ！」

「迅……！」

「さあ、自己紹介だ！我が名は金硬翼！
原点の世界の北郷一刀の意思を継ぐ者！」

「我が名は豪神谷！原点の世界の北郷一刀の
第一の矛！」

「私の名前は真藤策！原点の世界の北郷一刀を
愛する者！」

「俺達、『真・北郷軍』はあんた等三国の敵になる！
せいぜい怯えろ！絶対に俺達は勝つ！さらばだ！」

「何！？戦いに来たのではないのか！？」

「今回は俺達の力を見せるだけだ！
さあ！くらいな！」

迅は刀を振りかざす。
そして、気を集める。
まさか、あの構えは！

「刀次！今すぐに気を集めろ！」

「間にあわねえよ！」

「くっ！」

「『龍滅斬』！」

迅が刀を振り下ろした瞬間迅の
斬撃が衝撃波となり地を這ってくる。

「くっ！」

俺は完璧とは言えないが気を集めて
衝撃波の真正面に立った。

「一刀！」

「兄貴！」

防げるとは思えない。

でも、威力は無くなる筈だ。

刀次、華琳を守ってくれ……

衝撃波が近づいてくる。

そして、目の前にやってくる。

そして……

ドゴオオオオオーンッ！

大きい衝撃の音。

だが、衝撃は俺にぶつかることは

無かった……

何故なら助けてくれた人が居たから……

その人は……

「鷺！」

「久しいな、我が息子よ。

元気になっていたか？」

「ああ！」

「さて、弾き飛ばすから手伝え」

「おう！」

「行くぞ！」

「『龍神爪』！」

「『うおおおおっ！』」

俺達の龍神爪は迅の龍滅斬を弾き飛ばし消した。

だが、消して俺達の前に広がっていた光景に迅達は居なかった……

十六話 軍議

迅の龍滅斬を弾き飛ばした後俺達は迅達が組織する『真・北郷軍』に対する対策を練る為に玉座にて軍議を開いていた。

「まず、一刀。金硬翼が使ったあの技について教えて頂戴」

進行役の華琳は玉座に座っている。流石にこんな時の軍議で俺の膝の上に乗ることは無いらしい。

「あの技は迅の対複数技の奥儀だ。あれは俺達の奥儀とは違い一度使ったらしばらく使えない。

俺達の奥儀については鷺の方が詳しい筈だ」

俺はそう言って鷺にバトンタッチする。

「一刀達が使っている龍爪斬はまだまだ未完の技だ。だから、私と一刀の二人で返せたのだ」

それを聞いた瞬間刀次が立って鷺に抗議する。

「待ってくれ！鷺！俺達はそんなこと聞いて無いぜ！？俺達は十分強くなったからここに来たんじゃ無いのかよ！って言うか俺達が使え龍の名前が付く技ってもしかして全部未完か！？」

「うむ、人間が龍の名が付く技を教えたところであの技は未完にしかなんのだ」

「『人間が』？何だよ、その言い方

人間じゃなかったら龍の名が付く技を完成させられるみたいな言い方じゃないか」

「うむ、そうだ。龍ならばならば完成させられる」

「『はあ……っ！』」

龍ってあの龍か！？

俺達死ぬだろうが！

「安心しろ、黄龍に頼んでおいた」

「待て！今さらつとんでも無いことを言っただぞ！」

黄龍って四神の中央を守る龍じゃねえか！

そんなある意味龍神の龍によく頼みごとなんて出来たな！？

「酒をやったら簡単に落ちたぞ」

そんなに簡単！？

ってか俺の思想を読むなよ！

「ゴホンッ！これで一刀達の修行については完璧だ。

三国の守備は于吉が傀儡を生み出し守護しろ

大体三国に二百万も居れば十分だ」

「私が死にますよ!」

鷺は腰の刀に手を掛けながら

「やれ」

のふた文字。

(めっちゃ良い笑顔)

「はい!喜んでやらせて頂きます!」

刀次は俺の方を向いて

「兄貴、あれは俺達の父親と認めたのは誰だ?」

「すまん、俺だ」

「そこ!父の悪口を言うな!」

「すみませんでした!」

鷺が大声で言うと

「一刀のお父様ですって!?!」

華琳が玉座から立って
鷺の前に来る。

「以前のご無礼申し訳ありませんでした！」

私の姓は曹、名も操、字は孟徳、真名は華琳です！
一刀の妻として……」

華琳が挨拶をしようとすると
魏の武将と軍師全員が立つ。

「私だって一刀の妻になるんです！」

「私だって！」

「姉者に北郷は渡さんぞ！」

「隊長はうちのもんや！」

「隊長は自分のものだ！」

「隊長は紗和のなの！」

「兄様は私のです！」

「兄ちゃんはボクのだよ！」

「お兄さんは風のです！」

「一刀殿は私のものです！」

おっと？何か刀次と鷺がジト目で見てるぞ？
俺何かしたかな？

「兄貴魏の重臣達に何をしたんだよ……」

「手の出し過ぎだぞ……」

「俺をそんな目で見るな……」

えぐっ、えぐっ……どうせ俺は種馬だもん……

「どんな世界でも一刀殿は一刀殿だな、颯よ」

「そうだな、燕」

「二人共そこで納得するな！

そして、蜀と呉の将は笑いを止める！」

「「無理」」

「うわああ……ん！」

誰も心配してくれない……

もう良いや部屋の隅でうずくまってよう……

「一刀いじりはそこまでにして

あと、三国の武将達の鍛練もしたい

あの世界に行く。

貂蝉、卑弥呼、左慈、は私を手伝え」

「分かったわぁん」

「分かったぞい」

「分かった」

「あの世界？」

「ここより時間が十倍早く流れている」

「一刀が居なかったのはここでは一年だから
十年修行してたの!？」

「うむ」

「一刀……私達の為に……」

「当たり前だろ？愛する人達の為なら何でもするさ……」

「一刀……」

「華琳……」

俺達はゆつくりとお互いに近づき……

「兄貴、今は軍議中だ。そう言うことは聞てやれ」

「刀次の言う通りだ。」

それから一刀、しばらく魏のに会えなくなるから
魏の重臣達全員を閨に招けよ」

「俺に死ねってか！」

「刀次はしばらく準備しておけ」

無視かよ！

「良いなあ、兄貴は。俺なんか閨に招ける奴なんて一人も居ないんだぜ？」

「俺は死ぬけどな……」

だって、魏の皆さんが獲物を狙う目で見てるもん……
秋蘭でさえもそんな目だぜ？
どうにかして解決策を……
そうだ！

「天和が居ないじゃないか！
彼女達を抜きでやると不公平だ！」

良し！これで勝てる！
……あれ？でも華琳さんが
めちゃくちゃ良い笑顔……

「偶然彼女達はこの洛陽に居るのよ」

「俺死ぬって……」

俺の叫び声をあげている間皆は笑っていた。
皆俺に何か恨みでもあるのか？
俺何かした？

俺……（以下省略）

十六話 軍議（後書き）

最後の一刀君の文句は省略しました。
だって長いんですもん。
文句は無いでしょ？
では、また次回。

刀次の一日（前書き）

こんにちわゝ

今回は刀次君の拠点話です。

一応刀次君にも恋をさせたかったので。

ヒロインは恋の予定ですが

刀次君は一刀君の弟なので

もしかしたら別の子にも手を出すかも
しれません。

では、始まりゝ

刀次の一日

「今頃兄貴は搾り取られてるのかねえ」

俺は黄龍が来るまでの間

（って言うか兄貴が魏の全員を納得させるまで）
自由時間だから街で適当に時間を潰す
ことにした。

「街で時間を潰すって言うてもすることねえなあ」

こんなことなら城で鍛練してた方が良かったか？

「はあ……ん？」

溜め息をついていると前に見覚えがある姿が見える。
あれは……

「おゝい！恋！」

「刀次……」

歩いていたのは恋だった。

「どうしたんだこんな所で？」

「お腹減った……」

「飯食いに来たのか？」

「……（コクン）」

「そうか、じゃあ、一緒に食いに行かないか？
俺も腹減ってさ」

嘘じゃないぞ！

恋が可愛いから一緒に居たいとかそんなんじゃないんだからな！

「行く……」

「おお！じゃ、俺が奢ってやるよ」

「……良いの？」

「ああ」

俺が頷くと恋は俺の腕に抱きついてきた。

「あの、恋さん？」

胸が……

俺の理性が……

「……いや？」

「全然いやじゃありません！
早く行こうか！」

「ん
っ」

可愛すぎる！

マジでこの子飼いたい！

酒家

酒家に着いて俺達は飯を食っているんだが……

ザシュッ！もきゅもきゅもきゅ……

ええいつ！蜀の呂布は無差別破壊兵器か！
強過ぎる！さつきから客が見てるんだよ！
可愛いし！この可愛さがあつたら三国の
武将なんて一瞬で倒せるぞ！

「恋、こつちも美味いぞ」

「ん……」

ザシュッ！

本当に可愛い……

あゝやべ、マジで理性を保つのが精一杯だ……

「刀次、恋もうお腹一杯になった……」

「おお、じゃ、ちょっと散歩しようぜ」

「ん……」

その後勘定したんだか……
値段を見てびっくりしたのは秘密だ……

湖

「ふう……涼しいなあ」

「……」

「恋？」

恋はここに着いてから静かに俺を見ていた。
俺が話しかけてもただ俺を見ているだけだった。

「恋、さっきからどうしたんだ？」

「刀次、ちゃんと帰ってくる？」

「え？」

「鷺が言ってた。

刀次達の修行は危険って……」

そう、軍議の後鷺は言っていた。

『龍の修行は危険だと』

そうか……恋は心配をしてくれてるんだ……

「大丈夫だ、絶対に帰ってくるから」

「本当？」

「ああ」

「……刀次」

「ん？」

「恋、刀次のこと好き」

「え！？」

恋が俺のこと好き！？
マジか！？

「……いや？」

恋は涙目で俺を見ている。

そして俺は悟った。

恋は本気だと……

「恋、俺も恋のこと好きだよ……」

「本当？」

「ああ」

「嬉しい……」

「俺もだ……」

俺達はしばらくお互いを抱きしてめっていた……
また、こんな時間が来ることを願って……

刀次の一日（後書き）

どうでしたでしょうか？

恋の話し方についてのアドバイスとか

あったらコメントください。

では、また次回。

十七話 旅立ち

俺と刀次は今黄龍の迎えを城門から出た荒野で待っている。
待っているんだが……

「おい、鷲」

「何だ？」

「遅いぞ、黄龍。何で来ないんだ？」

もう約三時間程待っている。

それでもまだ来ない……

もしかして、忘れられてる？

「龍は約束を反故にしたりしないぞ」

「じゃあ、何で来ないんだよ！」

「うむ……」

はあ……

マジで忘れてたら修行出来ないじゃないか……

「ってか、皆の修行って何をするんだ？」

もしかして、俺達と同じことをするのか？

でも、鷲が弓を使えるなんて聞いたこと無いしな……

「弓については私の仲間が居る。
問題は無い」

「……人の心を読まないでくれ」

「考えよう」

考えることなく読まないでくれ……

「と言うか刀次、いつの間に恋と仲良くなったんだ？」

「告白された」

「え？あ、そう。おめでとう」

「おう、ありがとう」

「ふつ、これで刀次の嫁も困らないか」

鷺がそう言つと孫権さんは顔を俯かせてしまった。
あ、そう言うことか。

「鷺、耳を貸せ」

「何だ？」

「あのな、こによこによこによ……」

「む！？何だと！？」

「間違いは無いと思うぞ」

「むむむ……」

何が『むむむ……』か知らないが
鷺は考え込む。

「俺が何とかする。孫権さん！」

俺は手を振って孫権さんと呼ぶ。

「一刀、蓮華に手を出す気？」

怖！華琳さん怖いっす！

そんな目で見ないで！

「違うよ、ちょっと耳貸して」

「何？」

「こによこによこによ……」

「え！？それ本当！？」

「本当だって。だから、弟の為に何とかしたいんだよ」

「分かったわ」

「で、何なんだ？人を呼んでおいて」

「ああ、ごめん。」

ちよつと聞きたいことがあつてさ」

「？」

俺は刀次に聞こえない様に小声で言う。

「刀次のこと好きでしょ？」

「な！？そ、そ、そ、そんな訳！」

「その反応は認めている様なものだよ」

「むむむ……」

また、『むむむ……』か。
これはやってるのか？

「俺達が帰つて来たらその想いを打ち明けなよ」

「し、しかし……」

「忘れた？刀次は俺の弟だよ？」

言つてて悲しい……

「ふふつ、そうね。」

「一刀は『魏の種馬』だものね」

「良いもん……」

もう良いよ……」

「ふふつ、分かった。
やってみよう」

「ああ、頑張つて」

俺が孫権さんを応援すると

「一刀、刀次。

黄龍が来たぞ！」

鷺が刺した方を見ると神々しさを纏った
龍が飛んでいた。

「あれが黄龍……」

『北郷鷺、久しいな』

え？今黄龍は何て言った？
北郷鷺？

「鷺、お前本当に俺達の親父だったのか？」

「ああ。黄龍、我が息子達を頼むぞ」

『分かっている。お前の頼みだ。
二人共乗るが良い』

「おい、四神に乗っても良いのか？」

崇りとか無いよな？」

『良い良い。我が友の息子だ』

「分かった、じゃあ、乗るぞ。」

「やべえ、兄貴。

俺、今夢を叶えられた」

「そうか、良かったな」

「ああ」

この世界に来なきゃ叶えられなかった夢だな。
そんなことを考えていると孫権さんが近づいて来て

「刀次、帰ってきたら話がある」

「ええ！修行頑張ってください！」

「ふつ、言った通りでしょ？」

「ふふつ、そうだな」

「??？」

「分からなくて良いんだよ。

黄龍、頼む」

『つむ』

「一刀！ちゃんと帰ってきなさいよ！」

「ああ！俺は華琳の……魏の皆の物だからな！」

俺は黄龍が飛んで皆が見えなくなるまでずっと手を振っていた。

そして、皆もそれに答えてくれた。

十七話 旅立ち（後書き）

……蜀が空気だ……

蜀好きの方は申し訳ありません……

次からは何とかします……

では、また次回。

十八話 修行の始まり（一刀&刀次）（前書き）

こんにちわ

今回は一刀君と刀次君の修行です。

では、始まり

十八話 修行の始まり（一刀&刀次）

俺達は黄龍の上に乗る修行場所に向かっている。

「黄龍、修行場所はどこなんだ？」

『うむ、その前にお主等はどのような場所で修行した？』

「俺達は時間が早く進むところで修行した。」

『そのような場所が他にもある。
目の前じゃ』

「あの山か？」

「でっけえ」

本当にでかい。

エレベストなんか比べ物にならない位でかい。

あれ？

じゃあ、何で未来ではこの山が世界一大きい山じゃないんだ？

「黄龍、この山は……」

『聞きたいことは分かる。』

この山は未来に平地となるのだ』

「はあ？この山が？あり得ないだろ。」

何がこの山で一体何が起こるんだよ？」

『うむ、龍の名が付く技をお前達が完成させ
この山を平地にする』

「「はあ！？俺達が！？」」

『うむ、やはり無理か？』

「「……………」」

『（やはり無理か……
私も鷺に聞いた時は耳を疑った）』

『何！？あの山をお前の息子達が！？』

『うむ、間違い無い』

『あの山の大きさがどれだけだと思っているのだ！？
いくら龍の名が付く技でも…………』

『私が信じられんか？
私が今まで嘘を言ったことがあるか？
無いだろうに。
だから、信じる』

『うむむ…………』

『頼むぞ』

『分かった』

「なあ」

『何だ？』

「この技を完成させたらこの山が平地になる位なのか？」

『うむ』

「そうか。」

「じゃあ、早く修行を始めようぜ」

「そつだな」

『本当に信じるのか？』

「お前達には未来が見えないのだぞ？」

「黄龍にしては愚問だな……」

「未来は俺達が切り開く！」

『ふっ、良かろう！
始めるぞ！』

「「おう！」」

十八話 修行の始まり（一刀&刀次）（後書き）

短い……

それに地の文が少ない…

まあ、何とかありますよ……

それと、予告編でお願いしたこと考えてくださいましたか？
よろしく願います。

では、また次回。

十九話 修行の始まり（三国の武将&三国の軍師）

鷺side

「行っただか……」

黄龍に本気を出さない様に言っのを忘れていたが
大丈夫だろう。
私の息子達だからな。

「あの、父上」

「む？何だ？曹操」

「あ、私のことは真名の華琳でお呼びください。
ここに居る皆のことも真名でお呼びください。
あなたは一刀の父上なので」

「ふむ、良いだろう。」

だが、私は皆の真名を知らんのだが？」

「では、皆自己紹介なさい」

自己紹介省略

「それで、華琳、何だ？」

「私達はどのような修行を？」

「うむ、実戦形式だ。」

格上の相手と戦えば強くなれる」

む？魏の重臣達がものすごい目で……

「一刀達もそんな修行を？」

「う、うむ。」

基本を教えて体力を上げて
技を教えて私や貂蝉と戦った。」

「」「父上」「」

「む？」

何故だ？何故皆各々武器を構えているのだ？
しかも軍師でさえスコップを持っている……
仕方ない……

「」「一刀に無茶させた罰です！！！」」「」

ドゴオオオオオオッ！

「愛紗ちゃん、あれ不味いよね？」

「はい……」

「流石のお父様でもねえ」

「「お父様？」」

「私一刀のこと好きになっちゃったのよ」

「姉様！」

「あら？蓮華も刀次のこと好きなんでしょ？」

「そ、それは……」

「ふっ、我が息子はモテモテだな」

「ええ、つて、ええ！？」

私は手を上げて「よっ」と言っておく。
四人共幽霊を見たような顔になっている。

「ふむ、かわしただけだ」

私は全力を出して山になった
魏の武将や軍師達に近づき一人一人救出していく。
全員を救出すると全員跪き

「「「申し訳ございませんでした！」」」

私に謝った。

「む？」

「「「思わずお父様に斬りかかってしまって……」」」

息びつたりだな……

「気にするな。」

お前達が一刀のことを思っていたことが
確認できた」

「「「お父様……」」」

「さて、修行の話に入るぞ。」

武将の修行は左慈、貂蟬、卑弥呼、私
で行う」

「お待ちください！お父様！」

「何だ？桂花」

「それでは軍師の修行が……」

「問題無い。これがある」

私は懷から本を取り出す。

「本ですか？」

「ただの本ではない。」

一度自分の書いた自分の物語の中に
入ってみたいと思ったことは無いか？」

私がそう言つと桂花は首を傾げる。

「え？」

「この本はそれが出来る物だ」

「えっと……」

「つまりそれで物語を書けば自分が登場人物になれると
そう言うことで良いですか？」

「風の言う通りだ」

「ですが、それだと物語を書くのに時間が……」

「問題無い。これは大まかな物語を書けば自分でやってくれる。
この中で経っている時間はここでの十倍だ」

私がそう言つと軍師全員が納得した顔をする。

「一応補足をしておくと軍師は全て定石を取る訳ではない。
たまには奇策を取らなくてはならない。

だから、私が下手に教える訳にはいかないのだ。
分かったか？」

「「はい」」

「うむ。それと武将の件だがな」

私がそう言つと秋蘭が

「何か問題が？武將の件に関しては問題は無い様な気がするのですが」

「無いが弓を扱う者に関してだ」

「？」

「私も弓を扱えるがあまり弓は使わない
よって弓兵の気持ちはあまり分らないのだ。
よって、助っ人を呼ぶ。私が直々に教えた者だ。
来て良いぞ」

私が呼ぶと助っ人が歩いてくる。

三国の王や武將や軍師達は幽霊を見たような顔をしている。

「「「祭（公覆）！？」」」

「うむ、黄泉の国から帰って来たわい」

祭は高笑いして皆を見ている。

「祭は赤壁の戦いにて死にかけたが華陀のお陰で助かったのだ」

「そうだったの……」

「弓兵の鍛練は儂がするから安心せい！」

「酒は控えるよ、祭」

「むぐう……」

「では、行くぞ。」

軍師組も武将の修行場所に着いてから
本を書け良いな？」

「「「はい！」」」

十九話 修行の始まり（三国の武将&三国の軍師）（後書き）

物語がおかしくなっていたので八月八日修正しました。

二十話 修行（一刀&刀次）

「なあ、黄龍」

『む？』

「俺達の修行って何をするんだ？」

「あ！それ、俺も気になってた！」

『うむ。』

少し離れるが良い』

「ああ」

俺達はそう言われて黄龍から離れる。

『ふっ！』

黄龍が力んだ瞬間黄龍の覇気が黄龍の身体から流れていく。

「っ！何だよこの覇気！

龍ってこんなに覇気があるのか！」

『ふっ、今からこの覇気をお前達に流すと言っのに』

「はあ！？」

『龍と名の付く技は龍の覇氣を持つ者で無ければ完全に扱えん。』

よって、この覇氣をお前達に流す。

だが、大抵の者は己の中の覇氣に耐えられん。

お前達の修行はこの覇氣に耐えることじゃ。』

「でも、こんなの普通にやっても耐えられる訳無いぜ！」

『うむ、では手掛かりを与えよう。』

この覇氣に耐えるには己の覇氣をぶつけるのじゃが

己の覇氣は強くなる瞬間がある。』

「その瞬間ってのは？」

『秘密じゃ。』

普段のお前達なら……

二日位で倒れるかの。

倒れたら覇氣を抜いてやる頑張れよ。』

黄龍はそう言つて俺達との距離を一瞬で詰めて

『行くぞ！』

俺達の身体に手をかざし覇氣を流して行く。

「ぐあああああつ！」

俺達はそのあまりの苦しみに二日以上声を上げていたと
黄龍に言われたがあまりの苦しみで二日も経っていることに
気が付かなかった……

本当にこのままやって意味があるのか？

二日で俺はこの修行の意味が分からなくなってしまった……

二十一話 修行（三国組）（前書き）

こんにちわ

実は軍師組の修行の件なのですが

私は馬鹿なので策なんて立てられる訳が無いので
ちよつと軍師組の修行は省略を入れます。

あと、『三人の天の御遣い』の方は

まだ何とか出来ていないので

まだしばらく書けそうにありません。

八月末まで努力してみますが何とか出来なかったら

『三人の天の御遣い』を打ち切ります。

打ち切りにならない様に頑張ります。

では、始まり

二十一話 修行（三国組）

少し時は戻り洛陽

「行っただか……」

私達は一刀達が飛んで行った方向を見ていた。

「では、私達も行くとするか」

私が三国の将達に向き直りそう言うと

「……はい！」

三国の将達は笑顔で頷いた。

そして私は虚空を指で切り空間の狭間を創り出した。

「この中がこの世界よりも十倍早く時間が流れている。
何か質問は？」

私が聞くと

「は、はいでし！」

「何だ？ 諸葛孔明」

手を上げたのは天才軍師諸葛孔明だった。

「武将の修行は卑弥呼さん、貂蝉さん、左慈さん、そして、鷲さんの四人ですがこれではあまりにも……」

「偏りが出来ると？」

「は、はい……」

「大丈夫だ。」

戦は基本的には一人でする物では無い。

それに、彼女達は武将だ。

一刀達のように基本がなつて無い者達では無い。

一刀が言っていたが、春蘭が金硬翼に負けたのは力と早さだ。

ならば、ただ単に力と早さを鍛えれば良い。

あ、あと、体力も鍛えた方が良いな」

「あの、お父様」

「何だ？秋蘭」

「もしかして一刀達と私達の差はそれだけなのですか？」

「左様。」

一刀達にはそこまで難しいことは教えていない。

むしろ、武で教えるべき難しいことは無い。

分かったかな？諸葛孔明」

「えっと……弓兵も同じでしょうか？」

「祭」

「うむ。」

弓兵についてはただ慣れじゃ。

何度も撃って撃って撃ちまくるしかあるまい」

「分かりました！」

「うむ。」

他に質問のある者は？」

誰も手を挙げ無かった。

「では、入るぞ。」

全員ついてこい」

さて、一刀、刀次。

今から彼女達をお前達と同じ域まで到達させるから帰ってきたら怒らせるなよ……と、心の中で静かに呟いた私であった。

二十二話 修行（軍師組）（前書き）

こんにちわ

さっき少し読み返したのですが

話がおかしかったので少し修正しました。

何かご指摘があればコメントをよろしくお願いします。

では、始まり

二十二話 修行（軍師組）

世界の狭間

「ふう、着いたな」

「お父様、では風達は本の中に入りますので」

「うむ、気をつけろよ。」

どんな敵が出てきてもそれは
まやかしだと思え。

もし、知っている者が敵として出てきても
自分の中のその者の面影と比べるのだ。
そうすれば、答えは自ずと出る」

「ご助言ありがとうございますのです〜
では」

風はそう言って本を広げる。

その瞬間三国の軍師達は本の中に吸い込まれる。

「気をつけろよ……」

三国の軍師達を見送り私はそう呟いた。
今回の修行で最も辛いのはある意味で軍師達だからな……

風SIDE

「皆さん無事ですか？」

「ええ、何とか」

「大丈夫だ」

「大丈夫です」

「はわわ、本の中に本当に入っちゃいました……」

「あわわ、ここが本の中？」

「そうですね。」

でも、本の中に本当に入れるなんて……」

「ここで華琳様との交わりを……ぶはあー！」

「あわわ、大変です！」

全く、凜ちゃんは大変ですね

「はい、トントンしますよ
トントン」

「ぶがぶが……」

このままやってたら本当に凜ちゃんが死んじゃいますね

「では、始めましょうか」

そう言つて本を広げてお父様から教わつた
呪文を唱える。

「『我は汝の物語の鑑賞者。

我は汝の物語を鑑賞することを望む』」

最後の↑は風が自分で勝手に言つた訳では無いのですよ？
本当にお父様が言つてたのです

あれ？凜ちゃん達がこつちを白い目で見てますね
視線が痛いのです

そんなことを思っていると周りの景色が変わっていく。

「変われましたね。

風が最後に伸ばした時は
何をしてるんだと思いましたが」

「風が勝手にやった訳では無いのです
まあそんなことは置いておいて
ここは陳留らしいですね」

「あ、本当ですね。
でも、何で……」

『そうそう、言い忘れていたことがあつた』

「あわわ！」

「はわわ！」

『そんな幽霊を見る様な目で……』

まあ、良い。

物語は呪文を唱えただけでは始まらない。

どこかの城または陣に入った時点で始まる。

今回は陳留の城だけだが同じ物語でいくつもの選択肢がある。

全ての選択肢を取った時点でその物語は終了となる。

それだけだ。

気をつけろよ』

「ありがとうございます〜
では」

風がそう言うとお父様の幻影は頷いて消えていった。

「では、陳留のお城へと向かいましょうか」

風がそう言つと皆が頷く。

陳留の城

「いや〜

まさか、街の人達も一緒だなんて驚きました〜」

街に入って驚いたのは陳留の風景とここの風景が全く一緒だった
ことです〜

まさか、お父様は陳留に行ったことがあるのでしょうか？

「それより始まらないな……」

城に着いたら始まると言っていたが……」

『言い忘れていたことをもう一つ思い出した』

「あわわ！」

「はわわ！」

『またか……』

まあ、良い。

物語が始まるのは城に入ってすぐと言っ訳ではない』

お父さんがそう言っつと公謹さんが首を傾げて質問をする。

「どう言っつことでしょうか？」

『常に敵が仕掛けてくるのはいつか分からない。
だから、常時警戒しておくことが大切なのだ』

「分かりました」

『うむ、あと兵士に関してだがここに居るのは
一万程だ』

「少ないですね」

『それだけ最初の方だと言っつことだ』

「分かりました」

『うむ、ではの』

お父様の幻影はそう言って消えていった。

「つまり気を抜くなと言ったことですね」

「そうらしいな」

公謹さんがそう言っていると兵士が走ってくる。

「申し上げます！

城の外三里程に盗賊！

数は一万！」

「始まりですか」

風がそう言つと明皆が頷く。

「では行きましょうか」

「はい（ああ）！」「」

最初の戦ということで敵は弱かった。
今は戦が終り後処理をしている。

「敵は弱かったですね」

「これから強くなっていくと言うことだろう」

「気を抜けませんね」

お兄さんに怪我をさせない為に……
それにお兄さんが目指してならない
平和の為に……

そんな風の心情を察したのか凜ちゃんが風の
肩を叩きながら

「私達が軍師としての能力を伸ばせば
一刀殿の目指している平和も手に入る。
それまで頑張ろう」

「……はい（ああ）！」「」

でも、風達はこの時知らなかったのです……

この本がどこまで残酷な物語を作るかと言うことを……

二十三話 修行（武将編）

作者視点（第三者視点とも言つ）

「では、我等も修行を始めるぞ」

鷲が号令を掛けると三国の武将達は鷲の元に集まってくる。

その目には期待の目になっている。

「（大したことはしないと云つたのに）」

鷲はそう思っていたが実際は大したことをするのだ。

一刀達があそこまで強くなったのは確かに力と早さを鍛えたただけだがその方法が大したことなのだ。

「では、まずは後を見てくれ」

鷲がそう言つと三国の武将達は一斉に後を見る。

そこには横に並んだ妙な物が置いてあつた。

華琳は鷲の方を向いて

「お父様あれは一体？」

「うむ、あれは反射神経を鍛える物だ」

ただのバツティングマシンである。

（某アニメの発想を持ってきてみました）

まあ、反射神経と言う言葉が三国志の時代にあったかは知らないがあつたと仮定し鷺は刀を抜いて近くにあつたスイッチを押す。

因みにそのスイッチには漢字で『最高速度毎時三百km玉数無限』と書いてあつた。

「まずはこのスイッチを押す」

スイッチなんて言葉があつたか知らないが鷺は刀を構える。

「そうしたらあの穴から玉が飛んでくるからそれを……」

説明の最中に玉が飛んでくる。

が、鷺はそれを慌てずに

「斬り落とす！」

シュバツ！

何故こんな音が鳴るのかは謎であるがそれは置いておく。

「この装置は指定した数だけ玉が飛んでくる。では見本を見せよう」

鷺がそう言つと玉がいくつも飛んでくる。

鷺はそれを慌てずに斬り落とす。

シュバツ！シュバツ！シュバツ！シュバツ！

また謎の効果音だが気にしないようにお願いしたい。
そして、鷲は『中止』と書いたスイッチを押して中止させた。

「近距離の武器を使う者達はあれを落とす。
弓を使う者は避ける。」

因みに赤いスイッチは中止スイッチだからな」

「「「はい！」「」」

「では、と貂蝉と卑弥呼はここで監視をしろ。
私は次の修行の準備をしてくる。
ここでの最低目標は五百球だ」

「「了解よん」(したぞい)」「」

鷲はその返事を聞いて次の修行の準備に行く。
さて、ここで少し時間を進めてどれ程打ち落とせたか(または避け
れたか)を
公開しよう。

劉備 20

関羽 400

張飛 400

馬超 200

馬岱 150

呂布 7
0
0

趙雲 3
9
0

黄忠 2
0
0

魏延 2
0
0

嚴顏 2
5
0

孟獲 1
0
0

袁召 1
0
0

文醜 2
0
0

顏良 2
0
0

トラ 1
5
0

ミケ 1
5
0

シャム 1
5
0

一部論外な者が居たが呂布が流石ということ差をつけている。
(誰か忘れている?)
次に呉は

孫策 5
2
0

孫権 200

孫尚香 100

黄蓋 600

甘寧 300

周泰 250

張勲 100

と、江東の小霸王と言われる孫策は流石の部類で
黄蓋は鷺に修行をつけてもらっていたこともあり
最低目標を達成できた。
次に魏は

曹操 150

夏侯惇 400

夏侯淵 350

許緒 200

典韋 200

張遼 450

680 楽進

李典
300

于禁 350

と楽進が目標を達成しているが実は

武器の差である。

樂進の武器は格闘。

身体は鎧であり手は剣になる。

よってどんな武器よりも早く動けるのである。

だが、動くのは自分自身なので十分すごいと言える。
このデータを見た鷺は

このデータを見た鷺は

「しばらくこの修行をした方が良いな。」

卑弥呼！

「何じゃ？」

「劉備を鍛えておけ」

「分かったわい。」

ところで誰か忘れていたような気がするんじゃないか？」

「……気のせいだろう」

「気のせいじゃな」

[illegible]

何の笑いか知らないがこれで詳しいデータが出たので
修行は苦勞をしなさそうだ。

三国の武将達の苦勞はまだまだ続く。

「こら——！私を忘れるな——！
私はこう言う役なのか！？」

「私は呂布と殆んど同じ実力だぞ！
それを！
それを！」

「「出番をよこせ————！」」

二十三話 修行（武将編）（後書き）

さて、私が忘れてた人についてはコメントをくださると嬉しいです。
あと私が別の作品を書いていると言ったことを知らない人が
居るとのことなので↑

『三人の天の御遣い』（打ち切りの危機）

『盾としての運命を背負った御遣い』

『新たな外史を創る者達』

を書いていきます。

他の作品もよろしく願います。

二十四話 悩みを解決する小川

大三者視点

「はあ……はあ……」

『大丈夫か？』

「もう無理……」

そう言つて一刀と刀次は倒れる。

彼等はもう一週間ぶつ通しで龍の覇気を流されているのだ。

『（手掛かりも掴めず一週間ももつか……人間にしてはすごい方じゃ……）』

龍の覇気は曹操や孫策などとは比べ物にならない程に強い。

その二人も人間にしてはそうとう上の次元だが龍はそれを超えるのだ。

黄龍は一週間ももつとは思っていなかった。

『（しかし、このままでは倒れるのも時間の問題か……）』

そう思つた黄龍は更なる手掛かりを一刀と刀次に与えることにする。

『この山に悩みを解決してくれる小川がある。それを探せ』

「悩みを解決してくれる？」

龍の覇気の抑制方法でも教えてくれるのか？」

「そんな簡単だったら良いんだけどな……」

『お前達次第だ。』

さあ、行け』

「ああ、分かった」

「行つてくんぜ」

森の中

「なあ、兄貴」

「何だ？刀次」

「森ってこんなに猛獣が多かったけ？」

一刀達の前には猛獣。
後にも猛獣。

周りには猛獣だらけなのである。

「小川に行かせたく無いってだろ」

一刀達の足元には猛獣達の亡骸が倒れていた。

「ここは正面突破か？」

「しか無いだろ？」

一刀と刀次は刀を構え

「邪魔だああああああっ！」

猛獣達の隙間を走る。

二人に襲い掛る猛獣達は亡骸になっていく。
だが、一刀は違和感を覚える。

「（何で数が減らない？）」

そう、いくら斬っても数が減らないのだ。
まるで斬った猛獣が生き返っているように……

「（待てよ……何で気が付かなかった？
ここに居る猛獣達には傷が付いていない
猛獣は居ないって……）」

一刀は周りに居る猛獣達の身体を見る。
確かに猛獣達の身体には必ず傷が付いている。

「（そうか……そう言うことか……）」

「刀次！止まれ！」

「はあ!？」

「良いから止まれ!」

「っ!」

刀次は一刀の覇気に耐えられずに止まった。

「何だよ？」

「猛獣達を見る。」

おかしいとは思わないのか？」

刀次はそう言われて猛獣達を見る。

「傷が付いている？」

「そうだ。」

全ての猛獣達に傷が付いてるんだ」

「えっと？」

「おかしいだろ？」

俺達は全ての猛獣達に傷を付けたか？

仮に猛獣達が互いに争っていたとしてもだ
こんなに団結しているのはおかしい。

考えられるのは一つだ。

長い間こいつ等はここを守っていたんだ。

人間達から……

だから傷が付いているんだ」

「いくら倒しても数が減らなかったのは？」

「こいつ等を守る為に何らかの方法で死なくなっただんだ。
死ぬ度に何度も何度も立ち上がって俺達からここを守ろうとしたんだよ」

「……どうするんだ？」

刀次が質問すると一刀は刀を鞘にしまう。

「お前もしまえ」

「分かった」

刀次も刀を鞘にしまう。

それを見た一刀は猛獣達に向き直り

「ここを守護する動物達よ！

俺達はお前達の住処を荒らすのが

目的では無いんだ！

俺達の目的はこの山にある悩みを解決する
小川にある！

頼む！その小川までの道を開けてくれ！」

一刀がそう言うとお一刀達の前に熊が来る。

「お前が案内してくれるのか？」

一刀がそう聞くと熊は頷く。

「頼む」

熊はまた頷き歩き出した。

小川

「ありがとな、熊」

熊は頷き森へと帰って行く。

「さて、どうやって悩みを解決してくれるんだろうな」

「多分あれだと思っぜ、兄貴」

「あれ？」

一刀が刀次が刺している方を見るとそこには一人の女性が立っていた。

二十五話 残酷な物語（前篇）

大三者視点

三国の軍師達が最初の物語を終えてから
十個目の物語が始まろうとしていた。

「次で十個目ですね」

ほとんど簡単だと思ってしまう程

あっさり片づけてしまっているのです」

「それは三国の軍師達が揃っているからでしょう。

三国の軍師が揃えば敵がいくら策を練っても簡単に
済ませられます」

「これこれ亞莎ちゃん油断しては駄目ですよ」

程？はそう言いながら呂蒙を軽く叩く。

「ううゝごめんなさい」

程？は呂蒙が謝ったからもう良いと見たのか
叩くのをやめると周りの景色が変わる。

「幽州ですか」

程？の言う通り周りの景色は幽州である。

「では、お城へと向かいましょうか」

いつの間にか程？が仕切っているが

三国の軍師達はそれを気にせず全員が頷いた。

城

程？達が城に着き少し経って

「申しあげます！」

一人の兵士が玉座に駆け込んできた。

「何事ですか？」

「城の外五里程に盗賊！
数は六十万！」

（この際盗賊で何故こんなに集まったかと言う突っ込みは
無しにして頂きたいです） b y s

「用意出来る兵はどれくらいですか？」

「三十万です！」

「少ないですね」

今までの物語では差は大きくても五万程しかなかった。

それがいきなり二倍になれば驚くだろう。

「では軍議を始めましょうか」

また風が仕切っているが全員気にしていない。

軍議が終わり

城門前に兵士が集まっている。

（策は私が考えられ無かったので勝手に軍師達が進めてくれることを願います） b y s

「見えてきましたね」

風の言う通り前方に旗が見えてきた。
だが……

「冗談でしょ……」

あの旗は……」

敵の旗が見えた瞬間魏の軍師達は驚きの顔をした。

「風も何かの間違いだと思いたいです」

呑気な声で言っているが程？も身体が震えている。
郭嘉は開いた口が閉まらないでいる。

「あの旗が一体？」

呂蒙が聞くと風は落ち着いた声でこう言った。

「あの旗は……」

お兄さんの……いえ、天の御遣いである

北郷一刀の物なのですよ」

二十六話 鷲と左慈と卑弥呼と貂蟬の秘密会議

第三者視点

「修行を初めて一か月。
これより秘密会議を始める」

「「「おー！」「」」

鷲以外の三人は手を上げて返事をする。
……若干左慈のキャラが違うが……

「まず、卑弥呼。

劉備の成長具合はどうか？」

卑弥呼と呼ばれた筋肉たるまは
立ってそれに答える。

「うむ、順調だ。

スペシャルトレーニングプログラムを
最低目標を達成させるまでには仕上げた」

（スペシャルトレーニングプログラムはほぼ初心者の人にしか使え
ません）

by s

「うむ、次に貂蟬、左慈。
その他の者達はどうか？」

「ああ、これを見てくれ」

左慈は持っていた紙を広げる。
どうやらグラフのようだ。

「うむ、この一カ月で皆成長しているな」

グラフには例のバッティングマシンの玉を打ち返した（もしくは避けた）

数が書かれていた。

内容はこうである。

劉備	500
関羽	1000
張飛	1000
馬張	600
馬岱	550
呂布	3000
趙雲	700
黄忠	600

魏延 600

嚴顏 650

孟獲 580

袁紹 500

文醜 780

顏良 780

トラ 600

ミケ 600

シャム 600

公孫賛 550

華雄 1900

と前回卑弥呼のミスで書いて無かった者達を含め
蜀の全員が目標を満たしている。
次に呉は

孫策 890

孫権 590

孫尚香 580

黄蓋 600

甘寧 780

周泰 730

張勲 530

と、特に言うこと無し。
そして、魏は

曹操 600

夏侯惇 720

夏侯淵 670

許緒 610

典韋 610

張遼 960

樂進 1160

季典 560

于禁 610

と、特に言うこと無し。

これを見た鷺は驚いた顔をして

「この呂布の数字は何だ？」

「俺も驚いた。
だが事実だ」

「私も見てたからねん」

鷺は考えこんだ顔をし

「まあ、良からう。

皆、目標を達成したのだ。
次の修行に入る」

「「「分かった（わん）（ぞい）」「」」

二十七話 手掛かり

第三者視点

もし、小川に美しい女性が立っていたら大抵の人間はどのような反応をとるだろう？

大抵は見間違いだと思わずだ。

実際、一刀と刀次も見間違いだと思い目を手で擦ってみる。だが、結果は同じ。

どんなに目を擦っても目の前に居る女性は消えない。

一刀は覚悟を決めて声をかけようとする。

「あの！あなたは一体……」

誰なのですか？

一刀はそう聞こうとしたのだろうだが女性のあまりの美しさに一刀の言葉は続かなかった。

だが、女性は一刀の言いたかったを察したのか口を開く。

「私はこの辺りを守っている者です。

あなた方は黄龍が連れてきた方々ですね？」

その問いに刀次が答える。

「北郷一刀と北郷刀次です。

この小川は悩みを解決してくれると黄龍から聞いて……」

最後まで言おうとしていた刀次をその女性は
手で制しこう言った。

「分かっています。

ここに来たと言うことはそう言うことでしょうか？

良いでしょう、この小川の水を飲みなさい。

そうすればあなた達に必要な手掛かりが
掴めます。

答えはあなた達の中にあります」

一刀と刀次はそう言われ小川の水を飲む。
すると、頭の中に映像が流れてくる。

一刀の頭の中には魏の愛する者達。

刀次の中には呂布と孫権。

そして、目の前の女性が二人の子を抱き
育て別の世界に送る映像。

そして、その映像が終わり顔を上げると
その女性は目から涙を流していた。
そして、こう言った。

「二人共頑張つて……」

その面影は優しい母親の様な面影を纏っていた。
そして、二人は立ち別れの言葉を口にした。

「頑張るよ……母さん」

「行ってくんぜ！母さん！」

そして、二人の子供は自分の愛する者達を守る
為の力をつける為の修行に出かけた。

二十八話 残酷な物語（後編）（前書き）

こんにちわ

昨日は実家の墓参りに行っていたので
更新できませんでした。

今日はちゃんと更新します。

では、始まり

二十八話 残酷な物語（後編）

「敵の中に北郷殿が居ると言うことですか？」

呂蒙がそう聞くと程？は声を震わせながら

「分かりませんね」

あれが敵の策かもしれませんし」

程？はそう言いながら魏の軍師達を見る。

荀？は怒りで顔を赤くし

郭嘉は驚愕の表情である。

すると陳宮が前に出て

「つまり、軍師達の不仲を誘う策なのですか」

「そうですね」

桂花ちゃん

凜ちゃん

そろそろ落ち着いてください」

程？がそう言つと先程まで驚愕の表情を

していた郭嘉も怒りの表情になり

程？に詰め寄る。

「風！あなたは何とも無いんですか！

あれは一刀殿の……」

「軍師が取り乱したらどんな戦でも負けちゃいますよ」

「ぐっ！」

「それに、もし、風がお兄さんの旗を見て何の反応もしなかったって思ってるなら凜ちゃんの目は節穴なのです」

程？の口調は呑気なものだったが声は低かった。その声を聞いた郭嘉はすぐに謝罪した。

「ごめんなさい……」

「いいですよ」

ところで、桂花ちゃんはどうですか？」

程？は荀？を見て質問する。
荀？は一言短く

「大丈夫よ」

こう答えた。

その表情はしっかりと前を見ていた。
その表情を見た程？は安心して

「それでは、戦を始めましょうか」

（戦の描写は省略します） b y s

「終わったな。」

北郷殿は居なかったようだ」

周瑜はそう言いながら陸孫と戦の後始末をしている。

「今回は相手の策だった。

そう言うことですね？」

「そうだ。

だが、もし、北郷殿が敵になったら……」

「……………」

二人はその時のことを想像してみる。

間違い無く魏の軍師達は使い物にならなくなる。

「そう言えば物語を創る本は風ちゃんが持っていましたよね、
北郷さんのお父さんが言っていましたけどあれって
自分で物語を創るんじゃないかったですっけ？」

「風が言うには最初から用意されていた物語を再生したらしい。
この物語が用意されていた最後の物語。」

これからは風が物語を書いていくらしい」

「私も書きたいです」

周瑜は苦笑して

「私から頼んでみよう。
だから、早く仕事をしろ」

「わーい」

程？が居る場所

「凜ちゃん。

大丈夫ですか？」

「大丈夫です。

心配をかけましたね」

「いえいえ」

大丈夫なのですよ」

郭嘉それを聞いて微笑んだ。

これだけで済むのは流石親友だと言えるだろう。

二人の絆は姉妹のそれに等しい。

長い間苦楽を共にしてきた二人は互いを姉妹と認めていた。

これは二人共一刀に話していないが二人の生まれは同じ邑だった。

私塾も同じ。

家は隣。

家同士の付き合いもかなりあった。

だが、最初は二人は仲が悪かった。

私塾では天才と呼ばれていたが意見が二人共全く違った。

そんな二人が仲が良くなったのは邑に賊が攻め込んで来た時だった。

二人は私塾で学んだことを活かし賊を撃退したのだ。
それ以降二人は二人の理想を話し気が合い仲良くなった。
だから、二人は喧嘩をしてもすぐに仲直りする。

「風は凜ちゃんの様子を見に來ただけなのでさよならなのです」

「ええ、また」

天幕を出た程？は自分が持つている本を見つめた。

「お兄さんに怪我をさせないようにちゃんと修行をしないとイケないのです……」

程？はそう呟いて自分の天幕に向かって歩き出した。

一刀の役に立ちたいと一心に願って……

二十八話 残酷な物語（後編）（後書き）

軍師の修行はこれで終了です。

アイディアが思い浮かばなくて……

ねね「もっと出番をよこしやがれなのです!」

ああ、ごめん。

でも今回あったじゃん。

ねね「セリフ一つだけなのです!」

これからは気をつけるよ

では、また次回。

ねね「ひどいのです!」

二十九話 武将達の最後の修行 part 1 (前書き)

こんにちわ

今回は話がいくつになるか分からないので

partと言う風な分け方にしました。

では、始まり

二十九話 武将達の最後の修行 part 1

「うむ、集まったか」

鷲の前に居るのは三国の王や武将達。
これから最後の修行が始まるのだ。

「皆聞いている通りこれから最後の修行を始める。
最後の修行の内容は至極簡単だ。
私に一撃を当てる。
それだけだ」

鷲がそう言うつと三国の王や武将達だけで無く
左慈や貂蝉や卑弥呼も驚いている。
それもそうだろう。

三人でさえも鷲に一撃を当てるのは苦勞するのだ。
それをしると言っている。

「父上、人数の違いがあまりにも……」

夏侯淵がそう言うつと鷲は少し考える。

（これからは真名で書きます。名で書くと少しめんどくさい……）

「ならば、三国で分けるとするか。
まずは蜀の将達から来い」

鷲は刀を抜いて構える。
だが、愛紗達は動こうとしない。

「どうした？」

「鷲殿、いくら三国で分けても数が違いすぎます」

愛紗がそう言つと鷲は呆れた顔をする。

「関羽、お前は私のことをなめているのか？」

鷲は殺気を込めてそう言つた。

「そう言つことは私に一撃を入れてから言え」

「っ！」

あまりの殺気に愛紗は怯んでしまう。
すると、愛紗の前に恋が出る。

「呂布、お前が相手か？」

鷲がそう言つと恋は首を横に振る。

「……恋」

「む？」

「真名」

「良いのか？」

「……恋、刀次の恋人になる」

恋がそう言つと鷺は顔をニヤケさせたがすぐに顔をひきしめる。

「良からう、恋！

我が息子に相応しいか見てやろう！

他の蜀の武将も途中で入っても構わんぞ」

「……」

鷺がそう言つと蜀の武将達は黙つてしまう。

「まあ、良い。

来い！恋！」

「……呂奉先、参る」

二十九話 武将達の最後の修行 part 1 (後書き)

ここで part 1 終了です。

最近本当にスランプぎみです……

まあ、何とかしてみます。

では、また次回。

三十話 技の完成（前篇）

『帰って来たかの』

黄龍がそう言つて向いた方向には一刀と刀次が居た。

「待たせたな」

「死んでも蘇る動物とかありかよ」

二人はそんなことを言いながら歩いてくる。

『手掛かりは見つけたか？』

黄龍がそう言つと二人は静かに頷く。

『そうか、では、始めるぞ。
そこに立て』

二人は黄龍が指示した場所に立つ。
黄龍はそれを見て覇気を二人に流す。

「「っ！」」

『（それ程苦しんでおらん。成功か？）』

黄龍がそう思つた時黄龍は信じられない光景を目にする。

「「はあっ！」「」

バァァァンッ！

『何！？』

二人は龍の覇気を完璧に取り込みしかも二人の覇気が龍の覇気を超えたのだ。

『（これは成功などと言う次元では無い！これは龍すらも超えている！）』

「どうよ？黄龍。」

完璧に出来てると思うんだけど？」

「俺もそう思うな」

『う、うむ！では、最終試験として龍の名が付く技でこの山を破壊せよ！』

「……………」

二人はそう言われた瞬間黙ってしまった。

『どうしたのだ？』

「黄龍、ここには俺達の……………」

『（成程の…………この二人は優し過ぎる訳か…………）』

黄龍が困惑していると

「大丈夫ですよ、二人共」

森の方からあの女性がやって来た。

「母さん！」

「一刀、刀次、この山は将来あつてはならない山なのです」

「母さん、それどういう意味だよ？」

「ここは時間が他の地よりも早く流れています。そう言う場所はあるってはないのです」

「でも、ここを破壊したら母さんが……」

「一刀がそう言う」と女性は優しく笑いこう言った。

「大丈夫ですよ。」

「また別の地を守りますから」

「……分かった。刀次、やるぞ」

「……分かった」

二人は刀を抜き女性の方を振り向く。

「母さん、また会おうぜ！」

「行ってきます」

「行つてらっしゃい」

二人はその返事を聞いて微笑み違ふ方向に振り向き構える。

そして、

「『龍神天翼』！」

「『双龍羽翼』！」

ドゴオオオオオオン！

そんな轟音と共に山は消え去った。

一刀と刀次と言うと

「助かったぜ！黄龍！」

「死ぬかと思つた〜！」

山が消え去る直前に黄龍が二人を握っていた為無事だった。

『まさか、本当に消えるとはな……』

まあ、お前達の修行はこれにて終わりだ。

鷺達の所へ向かうとするか』

「「応！」」

その返事を聞いた黄龍は洛陽に向かって飛んだ。
一刀達を愛する者達の元へと送る為に。

三十話 技の完成（前篇）（後書き）

これにて一刀&刀次の修行編は終了です。

早く三国の武将達の修行編を終わらせたいけど
いつ終わるか分かりません。
では、また次回。

お知らせとお詫び

この度は皆様にお知らせとお詫びをしなくてはなりません。

実はこの『希望と絶望を持つ御遣い』を打ち切りたいと思います。

理由としてはこれからの物語が思い浮かばないのが原因です。

楽しみにしていた方々には大変申し訳ありませんが恐らく

もうこの作品の続きを書くことはありません。

心変わりをしておくことはあるかもしれませんが……

これから先は『盾としての運命を背負った御遣い』と『新たな外史を創る者達』をお楽しみください。

『三人の天の御遣い』は打ち切りになる可能性が高くなりました。

最後に皆様今まで本当にありがとうございました。

これからもよろしく願います。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5624u/>

希望と絶望を持つ御遣い

2011年8月21日03時51分発行